

歴史書 通信

11

2018 No. 240



【特集】

歴史書懇話会
創立 50 周年記念
読書アンケート

悩ましい中世ロシアの君主の
ニックネーム [中澤敦夫]

歴史書新刊ニュース
(9・10月)

歴史書以外の人文社会図書
新刊案内 (9・10月)

歴史系学会・シンポジウム
開催情報

歴史書懇話会

悩ましい中世ロシアの 君主のニックネーム

中澤 敦夫

(富山大学人文学部教授)

18世紀末ロシアの歴史家ニコライ・カラムジンの12巻からなる大著、『ロシア国史』の翻訳を始めてからかなりの年月が経つが、なかなか終わりが見えない。『国史』は建国(9世紀頃)からロマノフ王朝成立(17世紀初め)までのロシアの歴史を、内憂と外患、分裂と属国化などを経ながらも、統一国家が回復するプロセスとして描き出すもので、当時の歴史書らしく、人物を軸にした〈物語〉として歴史が語られている。歴史家の関心は、もっぱら統治者の事蹟と資質に向けられ、徳の欠けた臆病な君主たちへの批判は手厳しく、有徳で大胆な君主への讃辞は惜しまない。このような本を日本語で読むことができればよいと思ったこと、19世紀のロシア知識人にとって本書は祖国の歴史の知識の主な源泉であったことなどが、翻訳に取り組んだ理由である。

当然のことながら、本書には多くのロシアの君主の名が記されている。翻訳をされていて悩んだのは、君主たちには同名の者が非常に多く、読んでいるうちに読者は人物が特定できなくなり、

混乱したり誤解するのではないかという点だった。この時代のロシアの君主は、西欧のような「王」ではなく「公」(クニャージ knjaz') と呼ばれているが、『国史』に登場する公の数を試しに数えてみたところ、全部で453人いた。そして、同名の公が実に多い。総索引によれば、例えばウラジーミルが37人、フセヴォロドが22人、ミハイルが40人、イジャスラフが19人というふうである。西欧の君主にも同名は多いが、ロシアには、祖父や伯叔父の名、公族にだけ許される限定された名を子供に付ける慣習があり、そのことが同名の公の数を増やしている。

同名の君主を特定するためには、西欧の国王の場合、「イングランド王ウィリアム一世」のように、国名と王名と数字の代名を示す方法があるが、中世ロシアの公についてこの方法は普及していない。キエフ、ノヴゴロドをはじめとして支配都市(公座と呼ばれる)の数が多すぎると、父親の公座を相続したり、他の座を奪い取るなどで、比較的短期間に公座を代えることが多いため、都市名が特定にあまり役立た

ず、ナンバリングも難しいのである。

原文でも、公の名を混乱させない工夫はされている。例えば、ロシアに特有な父称という呼称法を用いるもので、ムスチスラフという公を父親の名ロマンと組み合わせて、「ムスチスラフ・ロマノヴィチ」と表記することで、他のムスチスラフ公と区別することができる。しかしながら、この呼称法に慣れているロシアの読者にとっては理解の助けになっても、日本の読者にとっては、公の名前が長くなるだけで、かえって理解のさまたげになる恐れがある。

そこで、窮余の策として考え出したのは、新しい公が登場するときなどに、訳文の公の名に「背番号」を振るという方法だった。幸い、史料の翻訳書『ロシア原初年代記』（名古屋大学出版会、1987年）では、訳文の公名に番号が振られているので、これを踏襲した上で、時代と範囲を拡張した番号を『国史』の公にも付すことにした。この番号はリューリク王朝の主要な一族の系図と対応しており、一族の中の世代的な位置も確認できる体系的なもので、公の特定には大変便利にできている。例えば、「ユーリイ手長公」は番号が[D17]であることによって、一族の始祖フセヴォロド公[D]の孫、ウラジミール・モノマフ公[D1]の年少の息子の一人であることがひと目で分かる。

これによって、訳文中の公の特定についての心配はなくなったが、一般の



写真1 ユーリイ手長公の画像：『1672年君主図譜』より。ユーリイの守護聖人は竜退治で有名な聖ゲオルギオスであることから、若々しい騎士の容貌で描かれている。

読者がこの番号を見て、すぐに公を認識できるわけではなく、単にレファレンスを提供したにすぎない。かえって、煩瑣で読み難くなったという面もある。そこで、何度も登場する主要な公については、公の名前に、通称、つまりニックネームを付すことを考えた。通称というのは、有名なものでは「イヴァン四世」を「イヴァン雷帝」と称するもので、西欧の国王にも「ウィリアム征服王」のような例がある。『国史』の原文では、公の名前が通称をとまって言及されることはほとんどないが、原文にない場合でも、訳者が適宜通称を付すことで、公についての読者の印象やイメージを強め、翻訳が理解しやすくなると考えたのである。

幸いなことに、中世ロシアには、通称を持つ公がかなりの数存在する。例えば、ネヴァ川の合戦でスウェーデン軍を破ったことから名付けられた「アレクサンドル・ネフスキ公」(13世紀前半)、ドン川でハン国との戦いで戦果を挙げたモスクワ大公「ドミートリイ・ドンスコイ公」(14世紀後半)などは、軍功に関わる命名で、これはいかにも君主の通称らしく分かりやすい。歴史書でも呼称として普通に使われている。

「ムスチスラフ勇猛公」「ムスチスラフ武運公」「ムスチスラフ無言公」(いずれも13世紀)のように本人の性格や資質に由来する通称は、公を特定すると同時に、キャラクターを際立たせる働きがあり、訳文にも使いやすい。「フセヴォロド大巢公」(12世紀後半)は子孫を多く残して、モスクワ大公家にいたる一族の始祖となったことからつけられた通称だが、ユニークで印象深い命名であり、理解の役に立つ。

また、正教キリスト教国家らしく、「ウラジーミル聖公」(10世紀後半)や「アンドレイ敬神公」(12世紀中頃)のような教会的な通称もある。肯定的な評価が初めから張り付いているのが気になるが、記号だと思えば、訳文に使うことができるだろう。

しかしながら、中世ロシアの公の通称には、否定的な評価をとまなうものも散見する。「スヴァトボルク邪悪公」(11世紀初め)は、「呪われた」という

意味の修飾語をつけて呼ばれ、これはキエフ大公位を狙って兄弟を次々と殺したことに由来しているのだが、最初からそのような評価を与えて登場させてよいのかとも思える。「ヴァシーリイ盲目公」(15世紀前半)は、政争の中で両目を潰されたことからくる通称だが、「暗い」という意味の修飾語は、かれの治世に否定的な印象を与えてしまう。「イヴァン雷帝」(16世紀後半)の「雷帝」は原語では「恐るべき」という意味で、次々と臣下を肅正した暴君というイメージと結びつくが、実は、



写真2 ウラジーミル聖公のイコン(16世紀ノヴゴロド):ロシアにキリスト教を導入した君主であることから、聖コンスタンチノス大帝のイコンに倣って、帝冠をかぶり鬚髯をたくわえている。

神の命令によって罪人を懲罰する大天使ミハイルになぞらえられており、本来は肯定的な意味あいが強い命名である。

さらに通称の中には、よく使われているのに、意味や由来が判然としないものもある。モスクワの中心地に銅像がある「ユーリイ手長公」(12世紀中頃)の「長い手」は、モスクワという当時の辺境から、「手を長く伸ばして」遠くキエフの大公位をうかがい、ついには手に入れたと解釈されることが多いが、確たる根拠はない。肉体的特徴からきた可能性もあり、そう呼ばれるようになった時期も分からない。モスクワ公「イワン巾着公」(14世紀前半)の「巾着」(錢袋)も、ソビエト時代

には、厳しく税を取り立てる吝嗇な人物で、宗主国キプチャク・ハン国に対して賄賂を渡して、ロシアの支配権を勝ち取った狡猾な君主であると解釈されていたが、最近では、いつもお金

が詰まった巾着を持ち歩いて貧者に施しを与えていた、慈悲深い君主と解釈し直されているようである。

このように、中世ロシアの公の通称にも様々なものがあり、翻訳で使うとなると、どれを選んだら良いかなかなか悩ましいところがある。少なくとも訳者の〈お節介〉で訳文中に通称を付すわけだから、注釈でその意味と由来くらい解説しておかねばならないと考えている。ところが、調べれば調べるほど、意味が定まらないもの、いつからそう呼ばれ始めたのかが分からないものが次々と現れてきて、本来の翻訳とは別のところで悪戦苦闘している毎日である。

〈表紙写真〉

ユーリイ手長公の銅像(モスクワ): 1954年にモスクワ創建者の記念碑として建立された。「長い手」についてのソビエト時代の解釈をよく表している。

新刊ニュース

9・10月の新刊 *発売予定のものもあります

歴史一般 事典/年表・地図/歴史学・補助学

公益財団法人古代学協会編

角田文衛の古代学 1

後宮と女性

A 5判 400頁 5,000円

吉川弘文館 [10月刊]

後宮はすべての淵藪であり、個性的な女性たちがその活動を担った。角田文衛の独壇場の後宮史・人物史をテーマに、珠玉の論考を集成。

978-4-642-07896-2

考古学 概論・通史/日本/アジア/ヨーロッパ/アフリカ/アメリカ/その他

北郷泰道著

改訂版 西都原古墳群

(日本の遺跡1)

四六判 198頁 1,800円

同成社 [10月刊]

大和政権の古墳文化成立にも影響を与えた南九州屈指の大古墳群について、最新情報もふまえわかりやすく紹介する解説書の改訂版。

978-4-88621-808-7

藤原哲著

日本列島における戦争と国家の起源

A 5判 378頁 9,000円

同成社 [9月刊]

弥生から古墳時代における武器や殺傷痕・葬送事例などの分析をもとに、戦闘形態や軍事組織の復元を試み、戦争と国家の起源を追究する。

978-4-88621-797-4

谷口康浩著

入門 縄文時代の考古学

四六判 240頁 2,400円

同成社 [10月刊]

縄文時代とはどのような時代だったのか? 縄文研究の第一人者が最新の研究成果からみえてきた縄文文化の全容をわかりやすく紹介する入門書。

978-4-88621-791-2

和田晴吾著

古墳時代の王権と集団関係

A 5判 400頁 3,800円

吉川弘文館 [10月刊]

編年などから、前方後円墳を頂点とする古墳の秩序形成と変化を追究。ヤマト王権と地域勢力の関係を論じ、国家と社会の実態に迫る。

978-4-642-09350-7

唐澤至朗著

民衆宗教遺跡研究の展開

A 5判 260頁 6,000円

高志書院 [9月刊]

本書では古墳祭祀・神仏と民衆の接点・小規模な納経供養・小さな墓地と仏堂などを対象に教義にとられない民衆の心情を読解。

978-4-86215-182-7

新里亮人著

琉球国成立前夜の考古学

B 5判 324頁 10,000円

同成社 [10月刊]

琉球国はいかに成立したのか。琉球列島の在地土器と舶来食器を分析し、各島嶼の社会状況を解明。琉球国成立史を考古学的に検証する。

978-4-88621-806-3

日本史

概論・通史／史料／古代／中世／近世／近代／現代／地方史

丸山雍成著

前近代日本の交通と社会

(日本交通史への道1)

A 5判 600頁 14,000円

吉川弘文館 [10月刊]

近世交通史研究を牽引した著者の研究成果を集成。古代～近世交通史の諸問題、「慶安御触書」、九州の織豊城郭など多彩な論考を収録。

978-4-642-03489-0

日本史史料研究会編

日本史のまめまめしい知識 3

(ぶい&ぶい新書 0003)

新書判 258頁 1,000円

岩田書院 [10月刊]

今回のテーマは「日本史のしっぽの先」。はて？…。小論27編が勢揃い。

978-4-86602-810-1

木本好信・中丸貴史・樋口健太郎編

時範記逸文集成

(岩田書院史料選書6)

A 5判 148頁 2,000円

岩田書院 [9月刊]

平安末期の官人・平時範の日記の逸文を集成。承保2年～天仁元年(1075-1108)の390条。人名索引。

978-4-86602-051-8

石上英一編

奄美諸島編年史料 古琉球期編下

A 5判 970頁 28,000円

吉川弘文館 [10月刊]

島津氏の琉球本島制圧が始まる1609年3月から、三浦按針の大島漂到記録などに関わる1624年まで。上巻補遺や歌謡も付載。

978-4-642-01418-2

瀧音能之・鈴木織恵・佐藤雄一編

古代風土記の事典

A 5判 260頁 3,200円

東京堂出版 [9月刊]

それぞれの地域に生きてきた人びとの生活・風習・信仰など、古代の時代から現代への変遷などを、古代風土記から読み解く。

978-4-490-10905-4

関口功一著

古代上毛野氏の基礎的研究

A 5判 382頁 8,400円

岩田書院 [9月刊]

主として著者の既刊本から、上毛野氏に関する論考を再編し、新稿も含む3編を加えて一書となす。

978-4-86602-048-8

関口功一著

古代上毛野の社会基盤

A 5判 238頁 6,000円

同成社 [9月刊]

上毛野地域の支配氏族の交代と各渡来系集団がもたらした文化や技術の変化を対比させ、中央と東国が共有する普遍性と上毛野の個性を抽出する。

978-4-88621-799-8

鈴木琢郎著

日本古代の大臣制

A 5判 394頁 9,000円

塙書房 [10月刊]

五世紀～平安中期までを視野に入れ、大臣の成立と君臣関係の問題、大臣の権能の問題、任命事由の問題、摂政成立の問題などを考察する。

978-4-8273-1298-0

倉本一宏編

現代語訳 小右記 7

後一条天皇即位

四六判 384頁 3,000円

吉川弘文館 [10月刊]

三条天皇が譲位し道長外孫の後一条天皇が即位。外祖父摂政に就いた道長への実資の眼差しや如何に。国母となった彰子の政治力も記録。

978-4-642-01822-7

西本香子著

古代日本の王権と音楽

古代祭祀の琴から源氏物語の琴へ

A 5判 320頁 3,000円

高志書院 [9月刊]

古墳時代以前より祭祀に用いられてきた日本の琴と、中国で古代より重んじられてきた琴を古代王権は如何に利用したのか。

978-4-86215-183-4

小口雅史編

律令制と日本古代国家

(古代史選書 30)

A 5判 368頁 7,500円

同成社 [10月刊]

古代天皇制や官僚制、土地制度など律令制にまつわる研究を軸に、外交問題や日唐比較といった視点も取り入れ日本古代国家論を追究した論文集。

978-4-88621-804-9

原口耕一郎著

隼人と日本書紀

(古代史選書 31)

A 5判 240頁 5,500円

同成社 [10月刊]

『日本書紀』を中心とする史書を批判的に読み込み、古代国家が創作した隼人の虚偽性と史実に介在する諸問題を徹底追究した挑戦の書。

978-4-88621-807-0

金澤正大著

鎌倉幕府成立期の東国武士団

A 5判 418頁 9,400円

岩田書院 [9月刊]

978-4-86602-047-1

甲斐源氏／信濃源氏／源範頼／諸源氏と門業の他、武蔵武士足立氏についても論究する。

樋口健太郎著

中世王権の形成と摂関家

A 5判 300頁 9,500円

吉川弘文館 [9月刊]

978-4-642-02948-3

天皇・王家は本当に摂関家から自立していたのか。中世王権論・王家研究を再検討。院政の展開、摂関家分立などについて新見解を示す。

五味文彦著

増補 吾妻鏡の方法〈新装版〉

事実と神話にみる中世

四六判 402頁 2,400円

吉川弘文館 [9月刊]

978-4-642-08339-3

『吾妻鏡』編纂方法や特徴、鎌倉の形成を解明する論考2本を新たに収録した決定版。鎌倉政権像が再現され、その時代がよみがえる。

清水 亮著

中世武士 畠山重忠

秩父平氏の嫡流 (歴史文化ライブラリー 477)

四六判 256頁 1,800円

吉川弘文館 [10月刊]

978-4-642-05877-3

「分け隔てない廉直な人物」と伝わる畠山重忠。諸系図や考古学から在地領主としてのあり方に鋭く迫り、武士としての生き方を描く。

悪党研究会編

南北朝「内乱」

A 5判 288頁 5,800円

岩田書院 [10月刊]

978-4-86602-058-7

『悪党の中世』『悪党と内乱』『中世荘園の基層』に続く第4論集。2017年の同名シンポの成果をもとにした論文11編。

黒田基樹・丸島和洋編

真田信之・信繁

(論集 戦国大名と国衆 21)

A 5判 354頁 5,000円

岩田書院 [9月刊]

978-4-86602-045-7

真田信之・信繁兄弟に関する近年の研究成果を中心に、15編の基本論文を再録。総論で研究史を整理。

大貫茂紀著

戦国期境目の研究

大名・領主・住人

A 5判 280頁 7,000円

高志書院 [10月刊]

978-4-86215-184-1

大名がぶつかりあう境目に本拠を置く領主や住人は大名と如何なる関係を築きながら政治的・社会的秩序を維持してきたのかを解明する。

畑大介著

治水技術の歴史

中世と近世の遺跡と文書

A 5判 280頁 7,000円

高志書院 [10月刊]

978-4-86215-185-8

中世・近世の河川堤防、護岸施設の構造、信玄堤の実態、堤防保護や崩壊を防ぐための工法等、治水技術の歴史を考古と文献で解明。

金子 拓著

鳥居強右衛門

語り継がれる武士の魂 (中世から近世へ)

四六判 300頁 1,800円

平井社 [9月刊]

978-4-582-47741-2

天正3年の長篠合戦で朽ちた無名の兵は、なぜ数多の文献に名を残し旗に姿を描かれたのか。彼の実像と虚像から歴史とは何かを考える。

竹井英文著

戦国の城の一生

つくる・壊す・蘇る (歴史文化ライブラリー 475)

四六判 224 頁 1,700 円

吉川弘文館 [9 月刊]

戦国期の城は、いつ誰の手で築かれ、いかに使われて廃城となったか。「城の使われ方」から戦争や城郭の実態を考えるヒントを与える。

978-4-642-05875-9

馬部隆弘著

戦国期細川権力の研究

A 5 判 804 頁 20,000 円

吉川弘文館 [10 月刊]

細川京兆家の分裂・抗争は、三好長慶ら配下たちの成長をもたらす。発給文書を編年化し、細川から三好への権力の質的変容を論じる。

978-4-642-02950-6

鹿毛敏夫・坪根伸也編

戦国大名大友氏の館と権力

A 5 判 352 頁 9,000 円

吉川弘文館 [10 月刊]

発掘調査の軌跡と権力構造解明に関する学際的研究の到達点を、大名居館論、権力論、領国論から検討。繁栄を極めたその実像に迫る。

978-4-642-02951-3

小島道裕著

城と城下 近江戦国誌

(読みなおす日本史)

四六判 278 頁 2,400 円

吉川弘文館 [10 月刊]

環濠集落や土塁囲みの館城から信長の安土まで。近江に残る城館遺構を訪ね、地形・史料・伝承をもとに、人々の営みと戦国社会に迫る。

978-4-642-06768-3

岡野友彦著

源氏長者

武家政権の系譜

四六判 220 頁 2,400 円

吉川弘文館 [9 月刊]

武家政権の正当性には「源氏長者」という地位が必要だった。源氏長者がいかに重要かを解明し、「日本」とは何かという問題にも論及。

978-4-642-08340-9

白水 智著

中近世山村の生業と社会

A 5 判 300 頁 9,500 円

吉川弘文館 [10 月刊]

山村の人々はなぜ山を下りず住み続けたのか。生活文化体系の視座に立って山村の生業や特質、外部社会との交流などを解き明かす。

978-4-642-02949-0

北川 央著

近世金毘羅信仰の展開

A 5 判 204 頁 2,800 円

岩田書院 [10 月刊]

全国に展開した金毘羅信仰の実態を調査し、参詣ルートや、個々の信仰の諸相を明らかにする。

978-4-86602-046-4

吉岡誠也著

幕末対外関係と長崎

A 5 判 384 頁 11,000 円

吉川弘文館 [10 月刊]

貿易都市長崎の変容を、対外関係業務の変質、長崎奉行の組織改革、港内警衛体制再編など「現場」レベルの視角で追究する。

978-4-642-03492-0

小島 毅著

志士から英霊へ

尊王攘夷と中華思想

四六判 258 頁 2,000 円

晶文社 [6 月刊]

尊王攘夷を掲げた志士達の実像は、為政者や時代によって書き換えられた。志士から英霊への転換は、どのようにおきたのか。

978-4-7949-7036-7

奈良勝司著

明治維新をとらえ直す

非「国民」的アプローチから再考する変革の姿

四六判 350 頁 2,600 円

有志舎 [9 月刊]

講座派マルクス主義・世界システム論・国民国家批判論を通過したいま、新たな非「国民」的視座からの明治維新論へ！

978-4-908672-25-5

友田昌宏著

東北の幕末維新

米沢藩士の情報・交流・思想

四六判 272 頁 2,800 円

吉川弘文館 [10 月刊]

情報の重要性を訴えた甘糟繼成と、探索周旋活動に努めた宮島誠一郎、雲井龍雄。動乱の中で紡いだ思想と維新後の異なる歩みを追う。

978-4-642-08341-6

國 雄行著

近代日本と農政

明治前期の勸農政策

A 5判 394頁 8,800円

岩田書院 [9月刊]

在来農業を継承・活用しつつ、西洋の農業制度を導入し勸農事業を管理して、有機的なシステムの構築を目指した過程を論究。

978-4-86602-052-5

中西啓太著

町村「自治」と明治国家

地方行財政の歴史的意義 (山川歴史モノグラフ 35)

A 5判 260頁 5,000円

山川出版社 [10月刊]

1888年の町村制公布から大正初期の町村「自治」について、いかに実施できたのか、またその歴史的意義について明らかにする。

978-4-634-52051-6

稲田雅洋著

総選挙はこのようにして始まった

第一回衆議院議員選挙の真実

四六判 400頁 3,400円

有志舎 [10月刊]

立候補制ではなかったなど、現代人の想像を超えた第一回総選挙の姿が、いま克明に描かれる。

978-4-908672-24-8

中元崇智著

明治期の立憲政治と政党

自由党系の国家構想と党史編纂

A 5判 308頁 10,000円

吉川弘文館 [9月刊]

藩閥政府と政党の提携に尽力した自由党系土佐派。非議員の板垣退助を党首に据え、いかに国家構想や経済政策を提起したのか。

978-4-642-03878-2

横井香織著

帝国日本のアジア認識

統治下台湾における調査と人材育成

A 5判 214頁 2,800円

岩田書院 [10月刊]

植民地支配の様相を、調査と教育という視点から描き直す。

978-4-86602-055-6

金 富子・金 栄著

植民地遊廓

日本の軍隊と朝鮮半島

A 5判 256頁 3,800円

吉川弘文館 [9月刊]

日本式の公娼制は、植民地社会にいかなる影響を与えたか。遊廓が浸透した過程を考察し、娼妓の姿をオーラルヒストリーなどから描く。

978-4-642-03880-5

吉田伸之編

山里清内路の社会構造

近世から現代へ

A 5判 416頁 6,000円

山川出版社 [9月刊]

長野県南西端の清内路について、豊富な史料群の十数年に及ぶ調査研究を基礎に、近世から現代を多面的に描き、山里社会から全体史を展望する。

978-4-634-52025-7

宇田川幸大著

考証 東京裁判

戦争と戦後を読み解く (歴史文化ライブラリー 476)

四六判 240頁 1,700円

吉川弘文館 [9月刊]

帝国主義・レイシズム (人種差別) の発想と、今日の歴史認識問題につながる戦争観を再検証。不可視化された戦争被害の諸相に迫る。

978-4-642-05876-6

山口輝臣編

戦後史のなかの「国家神道」

(史学会シンポジウム叢書)

A 5判 288頁 4,000円

山川出版社 [10月刊]

「国家神道」を戦後日本の政治史・宗教史・社会運動史など幅広い分野から議論し、今後の研究の基盤となる方向性を示す。充実した附録も収載。

978-4-634-52367-8

池 享・櫻井良樹・陣内秀信・西木浩一・吉田伸之編

みる・よむ・あるく 東京の歴史 4

地帯編1 千代田区・港区・新宿区・文京区

B 5判 160頁 2,800円

吉川弘文館 [9月刊]

丸の内・赤坂・弥生町…。都心に位置し、首都の役割を担いながら、濃密に過去の面影を残す。何がどう受け継がれ、今を形づくったか。

978-4-642-06829-1

池 享・櫻井良樹・陣内秀信・西木浩一・吉田伸之編

みる・よむ・あるく 東京の歴史 5

地帯編2 中央区・台東区・墨田区・江東区

B 5判 160頁 2,800円

吉川弘文館 [10月刊]

日本橋・京橋・銀座、築地、浅草・上野、本所・深川…。江戸の余韻を湛えつつ、新たな歴史を築く隅田川周辺の特徴をさぐる。

978-4-642-06830-7

飯澤文夫編

地方史文献年鑑 2017

(郷土史研究雑誌目次総覧 21)

A 5判 656頁 25,800円

岩田書院 [9月刊]

2017年に刊行された地方史研究雑誌1633誌の目次を、県別・雑誌ごとに収録。連絡先・所蔵先等の他、雑誌索引を付す。

978-4-86602-056-3

大石 学編

幕末維新史年表

A 5判 304頁 3,000円

東京堂出版 [10月刊]

天保15年(1844)から明治11年(1878)までの「幕末維新时期」を、写真や図などの資料と共に詳しくたどる年表。

978-4-490-20986-0

世界史

概論・通史／アジア／ヨーロッパ／アフリカ／アメリカ／オセアニア

小松久男編

1861 改革と試練の時代

(歴史の転換期 ⑨)

四六判 280頁予定 3,500円

山川出版社 [10月刊]

イタリア半島から対馬に及ぶユーラシアの東西で、さまざまな危機が生じていた1861年。試練のときを生きた人びとの胸のうちと行動に迫る。

978-4-634-44509-3

小此木政夫著

朝鮮分断の起源

独立と統一の相克 (慶應義塾大学法学研究会叢書 89)

A 5判 584頁 8,000円 慶應義塾大学出版会 [10月刊]

国際政治と地域政治の交錯を背景に、民族と国家が織りなす過酷な現代政治のドラマを緻密に描き出した、待望の論考。

978-4-7664-2545-1

宮脇淳子著

モンゴルの歴史

遊牧民の誕生からモンゴル国まで [増補新版] (刀水歴史全書 59)

四六判 320頁 2,800円

刀水書房 [10月刊]

16年前に「世界初のモンゴル通史」として誕生、モンゴルでも訳書完成。既に4刷も品切れて、新版発行。今秋著者のモンゴル訪問による最新事情まで魅力あふれる通史。

978-4-88708-446-9

小松久男著

近代中央アジアの群像

革命の世代の軌跡 (世界史リブレット人 80)

A 5変型 112頁 800円

山川出版社 [9月刊]

近代にロシアの支配に直面した中央アジア。そこでムスリムはどのように生きたのだろうか。彼らの軌跡を4人の人物に焦点を当てて迫る。

978-4-634-35080-9

水島治郎・君塚直隆著

現代世界の陛下たち

デモクラシーと王室・皇室

四六判 312頁 2,800円

ミネルヴァ書房 [9月刊]

君主制・天皇制の「これから」を見据えて…デモクラシーのもと、伝統と変革のはざまで揺れる各国の王室・皇室を鮮やかに描き出す。

978-4-623-08277-3

大森哲也著

エジプト死者の街と聖墓参詣

ムスリムと非ムスリムのエジプト社会史

A 5判 552頁 8,000円

山川出版社 [10月刊]

中世の巡礼地でもあった聖山ムクアッテム山麓の墓廟群。そこに集う人々を通し、様々な宗教を持つ人々が共生する前近代のエジプト社会を考察する。

978-4-634-67236-9

ドミニク・クレマン著／細川道久訳

カナダ人権史

多文化共生社会はこうして築かれた

四六判 296頁 3,600円

明石書店 [9月刊]

植民地期から今日まで、カナダでは人権をめぐる争点はどう移り変わってきたのか。気鋭の歴史社会学者が豊富な事例をもとに解説。

978-4-7503-4729-5

トマス・アルフォード著／中田佳昭・村田信行共訳

インディアンの「文明化」

アプセンティエール・ショーニー族の物語 (刀水歴史全書 98)

四六判 300頁 3,000円

刀水書房 [10月刊]

小さな部族のエリートが「白人的価値」と「インディアンの価値」の中で文字通り苦悩し翻弄されるが、両者の懸け橋を目指して懸命に生きる姿や日々の生活情景が楽しい。

978-4-88708-438-4

アン＝マリー・ジョーデンス著／加藤めぐみ訳
希望 オーストラリアにきた難民と支援者の語り
多文化国家の難民受け入れと定住の歴史
四六判 384頁 3,200円
明石書店 [9月刊]

オーストラリアの戦後史の一部をなしている難民について、戦争、政治・宗教・民族的迫害等の難民当事者の語りとあわせ紹介する。
978-4-7503-4723-3

文化史 文化史一般／政治・外交・経済／思想・宗教／
教育・科学／文学・美術・芸術／社会生活

モーリス・ヴァイス著／細谷雄一・宮下雄一郎監訳
戦後国際関係史
二極化世界から混迷の時代へ
A5判 416頁 3,500円
慶應義塾大学出版会 [8月刊]

激動の戦後史を外交や軍事だけでなく、経済・社会・文化の広い視点からダイナミックに描き出す。多くの国で翻訳されているベストセラー。
978-4-7664-2534-5

友岡 賛著
日本会計史
四六判 232頁 2,400円
慶應義塾大学出版会 [9月刊]

日本固有の帳合法、西洋式複式簿記の受容、そして会計原則・監査制度をめぐる挑戦と挫折など、会計制度の歴史を繙く初の日本会計通史！
978-4-7664-2546-8

グレゴワール・シャムユール著／加納由起子訳
人体実験の哲学
「卑しい体」がつくる医学、技術、権力の歴史
四六判 592頁 3,600円
明石書店 [9月刊]

フランスにおける「生きた人体の医学的実験への供与システム」を政治思想史、医学史の両分野から描き、哲学と医学史の協働の可能性を示す。
978-4-7503-4728-8

大谷栄一・菊地暁・永岡崇編著
日本宗教史のキーワード
近代主義を超えて
四六判 450頁 2,900円
慶應義塾大学出版会 [8月刊]

〈宗教〉をアップデートするための53のトピラ！日本宗教史の重要トピックについて、キーワード集という形をとって紹介。
978-4-7664-2535-2

門田誠一著
はんこと日本人
(読みなおす日本史)
四六判 150頁 2,200円
吉川弘文館 [9月刊]

日本人はなぜ、いつごろからはんこを押し続けてきたのか。その歴史を辿り、はんこをめぐる日本独特の文化・社会を探る。
978-4-642-06767-6

藤原 洋著
仮親子関係の民俗学的研究
筆親筆子と瀬戸内島嶼社会の家族誌
A5判 454頁 9,900円
岩田書院 [9月刊]

岡山県の笠岡諸島白石島の事例から、人とのつながりを見る。
978-4-86602-049-5

倉石忠彦著
都市化のなかの民俗学
A5判 500頁 11,000円
岩田書院 [9月刊]

自らの研究史をふまえ、「渋谷」の民俗、小説の中の民俗学など、新たなテーマで都市民俗学を記述。
978-4-86602-050-1

鈴木明子著
おんなの身体論
月経・産育・暮らし
A5判 216頁 4,800円
岩田書院 [10月刊]

月経名称とその意識の変遷を歴史的に追い、現代の事例から考察。更にお産を身体技法から読み解く。地域の事例2編ほか。
978-4-86602-054-9

水谷 類・渡部圭一編
オビシャ文書の世界
関東の村の祭りと記録
A5判 290頁 3,800円
岩田書院 [10月刊]

村の鎮守祭祀であるオビシャ行事、それを記録した「オニッキ」と呼ばれる史料が、連続と受け継がれてきた。
978-4-86602-053-2

浜田幸絵著

〈東京オリンピック〉の誕生

一九四〇年から二〇二〇年へ

A 5判 296頁 3,800円

吉川弘文館 [10月刊]

戦時に返上した挫折をへて、戦後の開催へ招致活動した在米日系人やIOCの動向など、その連続性に着目。メディア史から描く決定版。

978-4-642-03881-2

ヴィクトリア・ヴァントック著／浜本隆三・藤原崇訳

ジェット・セックス

スチュワーデスの歴史とアメリカ的「女性らしさ」の形成

四六判 428頁 3,200円

明石書店 [10月刊]

「スチュワーデス」という仕事の誕生から、男性を誘惑する女性というネガティブなイメージが生まれるまでの花形の職業の発展史を描き出す。

978-4-7503-4722-6

伝記

見瀬和雄著

前田利長

(人物叢書 292)

四六判 320頁 2,300円

吉川弘文館 [10月刊]

加賀前田家2代当主。信長・秀吉に仕え、家康暗殺計画の主謀者と讒言され徳川に下る。父利家からついで領国を拡大・発展させた生涯。

978-4-642-05285-6

角鹿尚計著

由利公正

万機公論に決し、私に論ずるなかれ（ミネルヴァ日本評伝選）

四六判 340頁 3,500円

ミネルヴァ書房 [10月刊]

幾度もの抵抗や左遷を受けながらも、殖産興業と公議公論の発展に尽力した生涯を振り返る。

978-4-623-08454-8

米倉誠一郎著

松下幸之助

きみならでできる、必ずできる（ミネルヴァ日本評伝選）

四六判 282頁 2,400円

ミネルヴァ書房 [9月刊]

その足跡を丹念にたどり、感情豊かで、強さと弱さの矛盾を抱えた人間像、そして壮大なる成功を導いたイノベーターとしての姿を描く。

978-4-623-08426-5

武田 徹著

井深 大

生活に革命を（ミネルヴァ日本評伝選）

四六判 340頁 3,000円

ミネルヴァ書房 [10月刊]

立志伝的叙述を越え、科学史に井深の思考を位置づけ、稀代の発明家的企業家の人生に迫る。

978-4-623-08462-3

新川敏光著

田中角栄

同心円でいこう（ミネルヴァ日本評伝選）

四六判 320頁 2,400円

ミネルヴァ書房 [9月刊]

昭和という時代を駆け抜けた田中が目指した政治とは何だったのか。本書は、田中政治の軌跡を辿りながら、戦後民主主義を再考する。

978-4-623-08425-8

地理

沈正輔著

地図でみる東海と日本海

対立と紛争の海から、相互理解の海へ

B 5変判 320頁 7,200円

明石書店 [9月刊]

同じ海を、日本では「日本海」、韓国では「東海」と呼ぶ。21世紀の今、どう呼ぶべきか。古地図、地理教育の歴史をさかのぼって検証。

978-4-7503-4721-9

雑誌

日本歴史

日本歴史学会編集

10月号(第845) = 9月刊
11月号(第846) = 10月刊

日本史専門の月刊誌として、また最も親しみやすい歴史知識の普及誌として、研究者から一般社会人まで、幅広い各層が購読。

一年間直接購読料 8,300円 [税・送料込]

◆各種割引制度有

二年間前払い 16,000円 [税・送料込]

三年間前払い 23,500円 [税・送料込]

学生・院生 一年間 5,000円 [税・送料込]

A5判 10月号 = 130頁、11月号 = 130頁

10月号 = 741円、11月号 = 741円

吉川弘文館 [9・10月刊]

吉川弘文館編集部編

歴史手帳 2019年版

A6判 320頁 950円

吉川弘文館 [10月刊]

日記を兼ねたコンサイス読史備要として毎年歴史家をはじめ、教師・ジャーナリスト・作家・学生・歴史愛好者等、多数の方々が愛用。

978-4-642-09845-8

歴史書以外の

人文社会図書新刊案内

2018.9・10

明石書店

オフショア化する社会 人・モノ・金が逃げ込む「闇の空間」とは何か? ジョン・アーリ 著/須藤廣・濱野健 監訳

.....四六判 2,800円 9月

フランス文学を旅する 60章 (エリア・スタディーズ) 野崎欽 編著.....四六判 2,000円 9月

特 集

歴史書懇話会 創立50周年記念

【読書アンケート】

このアンケートは、歴史書懇話会会員各社の著者ならびに近い方々に、これまで出会った数多くの歴史書のなかから、特に次の2点についてご回答いただいたものです。 *回答者名は50音順。品切・絶版の書目も掲載。

【アンケートA：①②】

2017年・2018年に出版された歴史書で特に印象に残ったもの(2冊)

【アンケートB：③④⑤】

これまで出会った歴史書の中で、「名著」として薦めるもの(3冊)

秋山 聰	小澤 実	新藤 透	七海雅人	宮城大蔵
浅岡善治	樺山紘一	末木文美士	仁藤敦史	宮脇淳子
井谷晋弥	菊池陽子	鈴木 淳	根井 淨	村井康彦
市 大樹	喜田浩資	鈴木靖民	橋本 雄	村 和明
稲葉継陽	北 康宏	関根達人	幡鎌一弘	村木二郎
岩下哲典	君塚直隆	曾根勇二	原口志津子	本村凌二
岩本由輝	金七紀男	平 雅行	原田敬一	森 公章
上里隆史	倉本一宏	高尾善希	疋田直己	森田安一
塩谷菊美	後藤 明	高岸 輝	福田千鶴	柳原敏昭
大田壮一郎	近藤和彦	高田貫太	藤川隆男	柳原伸洋
大谷栄一	桜井英治	高橋典幸	藤田英昭	山川 均
大津 透	桜井万里子	瀧井一博	古川隆久	山崎善弘
大濱徹也	佐々木 紳	竹内 亮	細川道久	横内裕人
岡野友彦	設楽博己	谷本晃久	前川一郎	若井敏明
岡村正純	芝 健太郎	鶴島博和	牧原成征	渡辺美季
岡本隆司	清水克行	外岡慎一郎	松木武彦	
小倉 宗	下垣仁志	永田雄三	三木哲夫	

秋山 聡

(東京大学教授／西洋美術史)

- ① 『天皇の美術史 (全6巻)』 吉川弘文館 2017～2018年
- ② ヴェザーリ『美術家列伝(第5巻)』中央公論美術出版 2017年 (ほか既刊:1・3・4巻)
- ③ ブルクハルト『イタリア・ルネサンスの文化』中央公論新社 2002年
- ④ ホイジンガ『中世の秋』中公バックス世界の名著 1979年
- ⑤ エルンスト・クリス、オットー・クルツ『芸術家伝説』ペリかん社 1989年

* * *

ある人について「人物像」を獲得するには逸話がつつあれば事足りる、と言うようなことをニーチェが述べていたかと思う。逸話やこぼれ話は、人のみならず時代や社会のイメージを獲得するにも有効な手段でもある。高校時代以来愛読している③や④は、歴史書としてだけではなく、逸話集としても読める。美術史学を専攻するようになってはまったのが⑤。一見ありえなさそうな数々の逸話から古今東西の「芸術家像」を浮かび上がらせる手法は圧巻で、逸話から引き出しうる情報の豊かさを学んだ。現在、西洋美術史にとって最も重要な逸話集とも言えるヴェザーリの『美術家列伝』の全訳が進行中であることは喜ばしい。全8巻の予定で、現今最新刊が②である。著名な大家だけではなく、今日ではほとんど忘れ去られた美術家たちにも様々

な逸話がある。凡才たちの裾野なくして天才の高みが生じえなかったことを知ることがわかる。また、近代以降少し硬直してしまった観のある「天皇像」について豊かな知見を与えてくれる①もまた、天皇と美術をめぐるエピソード集として楽しめよう。

浅岡善治

(東北大学准教授／ロシア革命史・農村社会史)

- ① 池田嘉郎『ロシア革命——破局の8か月』岩波書店 2017年
- ② 佐藤卓己『ファシスト的公共性——総力戦体制のメディア学』岩波書店 2018年
- ③ アイザック・ドイッチャー (田中西二郎・橋本福夫・山西英一訳)『トロツキー伝 三部作』新評論 1992年 (原著1954～63年)
- ④ 奥田 央『コルホーズの成立過程——ロシアにおける共同体の終焉』岩波書店 1990年
- ⑤ 溪内 謙『現代史を学ぶ』岩波書店 1995年

* * *

①は、「十月」で退場する「二月」の政府の側から、1917年の事態を「崩壊」の過程として捉える、新しいロシア革命史の試み。

「メディア史」の立場からドイツ・日本の総力戦体制の諸相を扱う②は、米英のそれとの共時性、今日的状況との連続性等を文字通り縦横に論じるが、もうひとつの総力戦体制＝スターリン体制の位置付けが明示されないの

は残念。

③は、「よい伝記は必ずや悪い歴史である」という定言を覆した伝記的研究の古典。E・H・カーの大著『ソヴィエト・ロシアの歴史』と同様、当時の史料的制約を補って余りある、研ぎ澄まされた歴史的洞察力には恐れ入る。

④は、まだソ連が歴史的存在になる前に世に出た農民史の傑作。東西の狭間の特殊な「磁場」において独自の発展を遂げたわが国のソ連史研究の高い水準を示すとともに、戦後日本の社会経済史研究の到達点をもなす。

⑤は、ロシア現代史（ソ連史）研究という「未完の遺産の継承」を未来の世代に訴える、碩学の入魂の書。私にとっての原点の一冊。

井谷晋弥

(戸田書店静岡本店 店長／文化人類学)

- ① 岩下哲典『病とむきあう江戸時代——外患・酒と肉食・うつと心中・出産・災害・テロ』北樹出版 2017年
- ② 保莉 実『ラディカル・オーラル・ヒストリー——オーストリア先住民アボリジニの歴史実践』御茶の水書房 2004年(2018年、岩波現代文庫に収録)
- ③ ベネディクト・アンダーソン『定本 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』リプロポート 1987年(2007年、書籍工房早山)
- ④ 鶴見良行『バナナと日本人——フィリピン農園と食卓のあいだ』岩波新書 1982年

- ⑤ 磯田道史『天災から日本史を読みなおす——先人に学ぶ防災』中公新書 2014年

* * *

①は、江戸時代に病と向き合ってきた人々について著した論集。本書の10のテーマは現代との共通点が見られるもので、各章を現代と比較しながら楽しく読み進めた。

②は、自分と異なる「他者」の歴史を聴くこと・理解することの諸問題を真摯に追求する一冊。「歴史」や「歴史学」の従来の考え方を揺さぶられ、その再考を促されるだろう。

③は、ナショナリズム論の古典的名著。グローバル化の諸問題が論じられる昨今、「国民国家」という概念を再考するにあたり本書の一読を薦めたい。近代日本の事例も分析されている。

④は、バナナの流通経路とその歴史的背景の分析を通じて、日本と東南アジアの不均衡な関係を明らかにした名著。刊行は30年以上前だが、身近なものから世界を見渡す著者の視点は決して古びていない。

⑤は、自然災害が相次ぐ昨今において広く読まれるべき一冊。災害の歴史を学ぶこと、先人たちの知恵を防災に活かすことの重要性が、わかりやすく著されている。

市 大樹

(大阪大学大学院准教授／日本古代史)

- ① 李成市『闘争の場としての古代史 東アジア史のゆくえ』岩波書店 2018年

読書アンケート

- ② 吉田孝『続 律令国家と古代の社会』 岩波書店 2018年
- ③ 妹尾達彦『長安の都市計画』 講談社選書メチエ 2001年
- ④ 東野治之『正倉院文書と木簡の研究』 塙書房 1977年
- ⑤ 青木和夫『奈良の都』 中央公論社 1965年

* * *

日本古代史の一教員として、若い学生諸君からの、なぜ古代史なのか？という問いかけが最も怖い。そんな私が最も頼りにしてきたのが、朝鮮古代史を専門とする李成市氏の諸論文である。①は、そうした渾身の作品が厳選されている。

奇を衒うのではなく、広い視野をもって、最も普遍的な問題に正面から挑む。この大切なことを、吉田孝『律令国家と古代の社会』（岩波書店）に接するたびに思い出す。②は、その続編となる遺稿集。

③は、都城制への関心から手にとったが、表題から受ける印象を遥かに超えるスケール、情熱的な語りかけに、すっかり魅了された。近刊の『グローバル・ヒストリー』（中央大学出版部）も大いに参考になる。

④は、恩師である東野治之先生の最初の著作。どの著作もそうであるが、断片的な史料からいかに情報を引き出していくのか、歴史研究の醍醐味を満喫できる。

⑤は、文句なしに面白い。史料に忠実にもとづきながら、これだけ生き生きと描き切るのは並大抵の苦勞ではな

い。歴史は最後は叙述力だと強く思う。

稲葉継陽

(熊本大学永青文庫研究センター教授・センター長／日本中世史・近世史)

- ① 谷山正道『民衆運動からみる幕末維新』 清文堂出版 2017年
- ② 高野信治『近世政治社会への視座』 清文堂出版 2017年
- ③ 小谷汪之『歴史の方法について』 東京大学出版会 1985年
- ④ 藤木久志『豊臣平和令と戦国社会』 東京大学出版会 1985年
- ⑤ 水本邦彦『近世の郷村自治と行政』 東京大学出版会 1993年

* * *

社会論を欠いた商品としての、歴史書、が氾濫する現在だからこそ、著者長年の研究を集成した重厚な書物に注目してほしい。

①は、大和の地域史料に徹底的にこだわり、民衆運動で近世・近代をつなぐ。民衆運動論を牽引してきた著者の仕事、いままた一冊を成したことに感動を覚える。

②は、幕藩制の上部構造から地域社会、近世人の宗教や生命観までをカバーする書評集。最新の研究に対して大局的観点からの発信を継続してきた著者の姿勢には本当に頭がさがる。

両著とも後進の導きの糸となろう。

③は、歴史学の方法や歴史認識の本質について最良の書。いまだからこそ若い人に読んでもらいたい。

④は、豊臣政権の特質を社会の側から抜本的に捉え直した名著。瑕疵を針

小棒大にあげつらうような批判が出て
いるが、本質はまったく揺るがない。

⑤は、近世前期の公儀行政権、領主
的土地所有、百姓の自治の相互関係を
畿内近国をフィールドに提示。その構
造は大名領国にも共通する。近世社会
論に取組むすべての者にとって必読の
書である。

岩下哲典

(東洋大学教授／日本近世・近代史)

- ① 松尾千歳『島津斉彬』 戎光祥出
版 2017年
- ② 喜多村園子『良寛を今に伝えた
小林二郎伝——一幕臣の足跡』 小
学館スクエア 2018年
- ③ 田代和生『書き替えられた国書——
徳川・朝鮮外交の舞台裏』 中央公
論新社 1983年
- ④ 片桐一男『阿蘭陀通詞の研究』 吉
川弘文館 1985年
- ⑤ 家近良樹『徳川慶喜』 吉川弘文
館 2014年

* * *

①は、「明治産業革命遺産」の生みの
親ともいうべき、幕末の薩摩藩主島
津斉彬の簡便な伝記。斉彬の生涯とそ
の意義を学べる。西郷隆盛も大久保利
通も斉彬の意志を継ぐ者だった。

②は、越後出身の幕臣にして山岡鉄
舟・高橋泥舟の弟子。明治維新で帰郷、
新潟で良寛関係の本を多く刊行した出
版人小林二郎。その唯一の伝記。著者
は県内外の図書館、史料保存機関に二
郎の姿を求めて書き上げた。

③は、秀吉が侵略した朝鮮王国と侵

略とは無関係とする家康の間に立っ
て、国交回復に尽力した対馬藩主宗義
智と家老柳川氏の両国国書偽造一件を
史料にもとづき描いた。信義に基づく
外交にこんなことがあったのか、と目
から鱗の一冊。

④は、外交・通商に欠かせない通訳
だが、黒子だけに残存する史料は少な
い。江戸時代、長崎出島や江戸の天文
台で活躍したオランダ通詞に関する、
初の、唯一の総合的学術書。

⑤は、複雑な幕末史を、慶喜の視点
から理解できる好著。

岩本由輝

(東北学院大学名誉教授／日本経済史)

- ① 佐藤昌明『飯館を掘る——天明の
飢饉と福島原発』 現代書館 2018
年
- ② 山下一仁『いま蘇る柳田國男の農
政改革』 新潮社 2018年
- ③ 中村吉治『日本社会史概説』 確
氷書房 1947年
- ④ 秀村選三『幕末期薩摩藩の農業と
社会』 創文社 2004年
- ⑤ 木谷 勤『讃岐の一豪農の三百年
——木谷家と村・藩・国の歴史』 刀
水書房 2014年

* * *

①は、東日本大震災発生当初、大量
の被災者の避難を受け入れ、1か月後
には原発事故による飛散放射線値が高
いとして全村民が強制避難させられた
福島県相馬郡飯館村の状況を描いたド
キュメント。

②は、20世紀初頭、農政学者・官

僚として登場した柳田は、現状では日本農業は「国の病」になると断言し、農民が生活できる農業への改革を提唱したが、実現されずに終始した。それが「いま蘇る」とは……？ 私の周辺でみる限りその担い手が見出せない。

③は、考古学少年であった私が志望大学を決めるにあたって手にした師との出会いの書であるが、前近代の社会を共同体の歴史として説き明かそうとする視点はいまも新鮮な輝きを有している。

④は、鹿児島県肝属郡高山町の郷士の裔・守屋雄次郎家文書にもとづき近代化への安易な包摂を拒んだ地域を解明した浩瀚な大著であり、かつて「封建制の極北」と呼ばれた地域にそれがあったのである。

⑤は、香川県仲多度郡多度津町の分岐の時期が分らないほど古い二つの木谷家を通して地域豪農 300 年の歴史を描いたものであるが、一方が「身上がり志望」を有したのに対し、もう一方が村共同体の一員に徹しようとしたあたり、興味深いものがある。

上里隆史

(法政大学沖縄文化研究所国内研究員／琉球史)

- ① 黒嶋敏・屋良健一郎編『琉球史料学の船出』 勉誠出版 2017 年
- ② 新名一仁編『中世島津氏研究の最前線』 洋泉社 2018 年
- ③ 村井章介『海から見た戦国日本』 ちくま新書 1997 年
- ④ 橋本 雄『中華幻想』 勉誠出版

2011 年

- ⑤ 高良倉吉『琉球王国の構造』 吉川弘文館 1987 年

* * *

近年、古琉球史を精緻に検討する研究が進んでいる。

①は、中世から近世における対日関係文書を中心に印や花押、文書様式などの古文書学的検討を加えた意欲的な論文集。「琉球史料学」という新たなアプローチを提唱する。

②は、近年蓄積された中世島津氏研究を多角的な視点から解説する好著。琉球含めた外交関係にも言及する。各論点の最新成果がコンパクトにまとめられた島津氏研究の入門書といえる。

③は、日本史の枠を超えた海域アジアの視座を与えてくれる書。16～17 世紀におけるアジアの海の世界の状況をダイナミックに捉え、戦国日本をその潮流の中で位置づける。

④は、従来の固定化された「冊封体制論」を超え、前近代東アジア外交の実態を中世日本の自己認識のあり方から描き出す書。

⑤は、古琉球の国王辞令書に注目し、その総体的分析から王府の組織や政治体制を浮かび上がらせた名著。史料の残存状況が厳しい当該期において、史料の持つ潜在的な価値を引き出したその手法は大いに学ぶところがあった。

塩谷菊美

(神奈川県立平塚商業高等学校教諭／真宗史)

- ① 鈴木俊幸『近世読者とそのゆくえ——読書と書籍流通の近世・近代』

平凡社 2017年

- ② 万波寿子『近世仏書の文化史——西本願寺教団の出版メディア』法蔵館 2018年
- ③ 藤堂祐範『増訂新版 浄土教版の研究』山喜房仏書林 1976年
- ④ 冠 賢一『近世日蓮宗出版史研究』平楽寺書店 1983年
- ⑤ 今田洋三『江戸の禁書』吉川弘文館 2007年

* * *

出版史に関する5冊を挙げてみた。

私は難しい本を読むとすぐに寝てしまう。①で扱われているような、普通の人が普通の暮らしの中で楽しみ、学ぶ本が一番だと思っている。普通の人には声や絵や動作による情報伝達も大切で、⑤が重視する講釈や芝居との関連はもちろん、仏教者たちの布教活動としての出版も見逃せない(②③④)。

③は、1930年に原著が刊行された。浄土宗の出版は藤堂祐範、日蓮宗は冠賢一ということで評価が定まり、それ以後、仏書出版研究は停滞気味だったが、今年になって②が真宗の出版に正面から取り組んだ。標題に「文化史」とあるわりに、まだ個々の出版行為に振り回されて「文化史」になりきっていないうらみもあるが、ようやく新しい一歩が踏み出せたことを高く評価したい。

大田壮一郎

(立命館大学准教授/日本中世史)

- ① 吉田賢司『足利義持』ミネルヴァ書房 2017年

- ② 小澤実編『近代日本の偽史言説』勉誠出版 2017年
- ③ 黒田俊雄『寺社勢力』岩波新書 1980年
- ④ 神田千里『宗教で読む戦国時代』講談社選書メチエ 2010年
- ⑤ 川合康『源平合戦の虚像を剥ぐ』講談社学術文庫 2010年

* * *

①は、出色の評伝であるとともに、室町中期の通史としても今後の定番となろう。堅実な叙述のなかに義持の「二日酔い」一覧表など著者ならではの視点が垣間見える。

②は、講義のネタとしては「おいしい」トンデモ歴史が、実は笑い事では済まされない深刻な問いを歴史家に突き付けていることを痛感させる。私自身かつて偽史の術中にハマった一人(反省)。

③は、黒田史学のエッセンスが詰まった一冊。仏教史の泰斗として知られる著者だが、副題「もう一つの中世社会」が物語るように、中世の時代像を豊かにしたことも大きな功績。

④は、教義や宗派から説くお決まりの宗教史ではなく、戦国の人々が何を信じたのかを追究し、天道思想に「国教」の成立を見出した。著者の発想は本書に限らず大胆で示唆深い。

⑤は、大河ドラマや時代劇に心躍らせてきた世代の合戦イメージを木っ端微塵にする痛快な一書。盛者必衰を説く〈平家物語史観〉を相対化し、全国的内乱から幕府成立の必然を描き出す叙述の展開も見事。

大谷栄一

(佛教学大学教授／近代仏教)

- ① 末木文美士『思想としての近代仏教』中央公論新社 2017年
- ② 諸点淑『植民地近代という経験——植民地朝鮮と日本近代仏教』法蔵館 2018年
- ③ 吉田久一『日本近代仏教史研究』吉川弘文館 1959年
- ④ 橋川文三(筒井清忠編・解説)『昭和ナショナリズムの諸相』名古屋大学出版会 1994年
- ⑤ 安丸良夫『近代天皇像の形成』岩波書店 1992年

* * *

2000年前後から、近代仏教研究が盛り上がりを見せ、その成果が続々と刊行されている。

①は、日本仏教史研究を牽引する筆者の近代仏教研究に関する最新の成果。近代における仏教の役割を問い直し、近代の再考を迫る。

②は、韓国の女性研究者によるトランスナショナルな近代仏教研究の成果。植民地朝鮮における日本仏教の社会事業を帝国史の観点から鋭く分析している。

③は、日本の近代仏教研究を定礎した記念碑的作品。本書で提起された「仏教の近代化」をめぐる問題は、今なお議論されている。

日本近代と宗教の関係を考えるうえで大きなヒントを与えてくれる古典が、④と⑤である。超国家主義と信仰の関係を考えるうえで、④に収められた論考の数々は今なお必読である。

⑤は、近代転換期における天皇像の構築過程を思想史の観点から解明した名著だが、天皇制コスモロジーと民衆宗教の関係や正統と異端の問題など、その研究や視点をどのように更新できるかが、現在、問われている。

大津 透

(東京大学教授／日本古代史)

- ① 大津 透・池田尚隆編『藤原道長事典——御堂関白記からみる貴族社会』思文閣出版 2017年
- ② 古畑 徹『渤海国とは何か(歴史文化ライブラリー)』吉川弘文館 2018年
- ③ 吉田 孝『律令国家と古代の社会』岩波書店 1983年
- ④ 仁井田 陞『唐令拾遺』東方文化学院 1933年(東京大学出版会 1964年復刊)
- ⑤ 大津 透・河内祥輔・藤井譲治・藤田 覚編『天皇の歴史(全10巻)』講談社 2010～2011年

* * *

①は、30年近くかけて完結した山中裕編『御堂関白記全註釈』全16冊の成果をふまえて、読める事典として編集したもの。時間がかかったが、歴史と文学の若手研究者が協力して、平安時代の古記録を読み解く上で役に立つ本をめざした。

②は、史料の少ない渤海について、いくつかの視点を設定して多角的に意義を明らかにする。構成がよく考えられた良書だと思う。

③は、日本の古代国家を、東アジア

の文明のなかで位置づけ、律令制継受の意義を広い視点から考え、古代史の枠組みを変えた名著である。緻密な実証研究だが、ぜひ通読してほしい。なお著者は一昨年逝去されたが、残された論文を集めて続編を編んだ。

④は、律令制比較研究に欠かせない古典である。北宋天聖令の発見をうけて中国の中国史研究者からも再評価されることになった。

⑤のシリーズは、このような実証的な企画が可能になったこと自体に、歴史学として大きな意味がある。出版までずいぶん苦労があったが、来年の「譲位」をうけて、学術文庫で再刊されることになり、新たに補足や増補も加えられている。

大濱徹也

(筑波大学名誉教授／日本史)

- ① 鈴木範久『日本キリスト教史——年表で読む』 教文館 2017年
- ② シンメルベニツヒ、甚野・成川・小林訳『ローマ教皇庁の歴史』 刀水書房 2017年
- ③ 山路愛山『基督教評論・日本人民史』 岩波書店 1966年
- ④ 鈴木範久『内村鑑三日録（全12冊）』 教文館 1998～1999年
- ⑤ 宮田光雄『権威と服従——近代日本におけるローマ書13章』 新教出版 2003年

* * *

①は、イエスの登場をふまえ、ザビエル来日から2000年までにおよぶ日本におけるキリスト教の在り方を、時

代に生きた信仰者の多様な相貌で描き出した作品。日本のキリスト教とは何であったかが読み取れる。

②は、ローマにおけるキリスト者信仰共同体の成立から教皇権が確立されていく道程を時代社会に蠢く人心と関わらせて描いた作品。宗教的権威の創作とは何かが読み取れる。

③は、明治プロテスタントの相貌を同時代史として述べた「現代日本教会史論」、「日本国民史」をめざした未完の「日本人民史」。

④は、時代に向き合ってきた内村鑑三の多様な相貌がその歩みを追体験することで描き出された作品。

⑤は、ローマ書13章にどのように向き合ったかを解析することで日本プロテスタントの信仰の場とは何であったかを問いかけた作品。

それぞれが歴史を読み取る作法とは何かを提示している作品。

岡野友彦

(皇學館大学教授／日本中世史)

- ① 湯山賢一編『古文書料紙論叢』 勉誠出版 2017年
- ② 平川 新『戦国日本と大航海時代』 中公新書 2018年
- ③ 小川 信『足利一門守護発展史の研究』 吉川弘文館 1980年
- ④ 久保田 収『中世神道の研究』 神道史学会 1959年
- ⑤ 黒田俊雄『日本中世の国家と宗教』 岩波書店 1975年

* * *

①古文書学は、様式論・機能論から

読書アンケート

形態論・料紙論へと進んできた。そんな「古文書学」の最前線を、くまなく知ることができる良書である。

②は、「開国は善、鎖国は悪」という、近代日本に無意識に通底する歴史認識から、ようやく脱出できそうな兆しを感じさせる新書。いずれにせよ世界史の中で日本史を考える努力を惜しんで はなるまい。

③は、「実証史学、かくあるべし」というお手本のような名著。言わずも かな我が永遠の目標である。

④は、「神道五部書」成立経緯の考 証が秀逸。今日の中世神道史研究は、 未だに半世紀以上も前の、この名著を 越えていない。

⑤権門体制論と顕密体制論は、「莊 園制」理解と一体のものとして立論さ れた。そのことを無視した黒田史学批 判には意味がない。多くの欠陥が指摘 されてはいるものの、やはり今しばらく 日本中世史研究は、権門体制論とい う仮説を導きの糸としていく他ないだ ろう。

岡村正純

(大阪高裁内ブックセンター顧問／日本中世 史)

- ① 平山 優『武田氏滅亡』 K A D O K A W A 2017年
- ② 粟野俊之『最上義光』日本史史 料研究会 2017年
- ③ 佐藤進一『鎌倉幕府訴訟制度の研 究』 畝傍書房 1943年(1993年 岩波書店より再刊)
- ④ 井上鋭夫『一向一揆の研究』吉

川弘文館 1968年

- ⑤ 網野善彦『日本中世の非農業民と 天皇』 岩波書店 1984年

* * *

①は、いわゆる研究書ではないが、 長篠合戦以後武田氏を建て直した勝頼 期を、時系列に沿って詳細に跡付ける。

②は、只一人最上氏だけを研究し続 けた著者の集大成。義光に関する唯一 の「研究書」。

③は、戦後中世史研究最大の巨人の 代表作。

④は、社会史や民俗学的視点も合せ 持つ、先駆的業績。今なお必読の文献。

⑤は、網野史学の真髄。

岡本隆司

(京都府立大学教授／東洋史・近代アジア史)

- ① 大塚 修『普遍史の変貌』 名古 屋大学出版会 2017年
- ② 新居洋子『イエズス会士と普遍の 帝国』 名古屋大学出版会 2017年
- ③ 間野英二『中央アジアの歴史』 講談社 1977年
- ④ 飯塚浩二『東洋史と西洋史のあい だ』 岩波書店 1963年
- ⑤ 宮崎市定『東洋における素朴主義 の民族と文明主義の社会』 平凡社 1989年(原著1940年)

* * *

東洋史学冬の時代である。どうせ東 洋史・アジア史の歴史書など、誰も選 ばないだろうから、その名著・秀作を 推すことにした。東洋史は単なる中国 史・東アジア史ではなく、日本史・世 界史と不可分の概念・分野なので、そ

こに留意している。

①②は、まったくちがう文脈ながら、「普遍」概念とアジアの関係を考究した最新の研究成果で、いかに西洋中心の歴史観・世界観が世界におけるアジアの位置づけを左右してきたか、あらためて認識できる。

③④⑤は、各々の視角から、遊牧・農耕の南北交渉が東洋史のダイナミズムを形成した史実経過を描く古典というべき名著。

すなわち選んだ書籍は、いずれもアジアを軸に世界史全体を対象とし、日本人の世界観・歴史観に関わるものである。さもなくば東洋史・アジア史を名乗る資格はない。「グローバル・ヒストリー」を標榜する時代なら、専門家も含めて、もう少し自覚したほうがよい点ではある。

小倉 宗

(関西大学准教授／日本近世史)

- ① 高塩 博『江戸幕府法の基礎的研究（論考篇・史料篇）』汲古書院 2017年
- ② 藤田 覚『勘定奉行の江戸時代』ちくま新書 2018年
- ③ 平松義郎『近世刑事訴訟法の研究』創文社 1960年
- ④ 朝尾直弘『近世封建社会の基礎構造——畿内における幕藩体制』御茶の水書房 1967年
- ⑤ 藤井讓治『江戸幕府老中制形成過程の研究』校倉書房 1990年

* * *

①は、「公事方御定書」の体系や編

纂・増補修正過程、同時に施行された「公事訴訟取捌」の意義など、幕府法を中心部分を本格的に解明した秀作。

②は、勘定奉行や経済政策を切り口に、江戸時代の大きな流れと幕府政治の実像を活写する。著者の作品は専門書・一般書ともに優れたものばかりだが、本書もその一つ。

③は、刑事法の側面から、幕府の組織・運営の構造と幕藩体制の特質を究明する。徹底した史料調査と正確な論証、適切な叙述は群を抜いており、法制史にとどまらない近世史研究の古典。

④は、村落の基礎レベルより支配機構の最上層にいたる近世社会の全体像を具体的に明らかにし、畿内から幕藩体制一般を見通した画期的成果。時代や社会の展開を総体として把握する視角・方法には学ぶべき点が多い。

⑤は、将軍家をめぐる政治状況や権力構造と、老中制を中核とする幕府の機構をトータルにとらえ、その形成過程を動的に描き出す。卓越した方法論と実証性は、近世政治史研究を代表する業績。

小澤 実

(立教大学教授／西洋中世史・北欧史・史学史)

- ① 熊野 聰『ヴァイキングの歴史』創元社 2017年；平凡社 1983年
- ② マーガレット・メール（訳者代表千葉功・松沢裕作）『歴史と国家——19世紀日本のナショナルアイデンティティと学問』東京大学出版会

読書アンケート

2017年

- ③ 阿部謹也『ハーメルンの笛吹き男——伝説とその世界』ちくま文庫
1988年；平凡社 1974年
- ④ 阿部謹也・網野善彦・石井進・樺山紘一『中世の風景（上・下）』中公新書 1981年
- ⑤ 深沢克己『海港と文明——近世フランスの港町』山川出版社 2002年

* * *

①は、農民という観点から見たヴァイキング世界論。原著は30年以上も前ながら、そしてそうであるがゆえに、日本人による「西洋史」の営みとは何かを考えさせる。

②は、近代日本の歴史学生成のプロセスを、精緻な史料解説により解明した史学史の金字塔。このような作業を成し遂げたのがドイツ人という点は示唆的。

③は、中世に限らず歴史を学ぶもの誰もが読むべき書。メロウな叙述にも史料解釈にもすでに異論はあろうが、歴史家の探究心を余すところなく伝える不朽の名著。

④は、日本中世史家2名と西洋中世史家2名がそれぞれ論点を持ち寄り、自由闊達に討議した記録。日本史と西洋史が同じ土俵で対話するユートピアの記録。

⑤は、海と陸を結ぶ海港というレンズを通じて、近世という時代とフランスという地域のあり方を問い直す。本書に限らず深沢のすべての歴史叙述は無駄なく豊かである。

樺山紘一

(印刷博物館館長／西洋中世史)

- ① 三佐川亮宏『紀元千年の皇帝』刀水書房 2018年
- ② 鹿島 茂『神田神保町書肆街考』筑摩書房 2017年
- ③ ビレンヌ『ヨーロッパ世界の誕生』創文社 1960年
- ④ 原 勝郎『日本中世史』平凡社 1969年（初出は1906年富山房）
- ⑤ 梅村忠夫『文明の生態史観』中公文庫（初出は1957年『中央公論』）

* * *

①は、学士院賞を受けた『ドイツ史の始まり』（2013）の姉妹編と言えるが、両方あわせて歴史学の正統性を回復。国家主題の選択から、論述の手続きまで、みごとに整って。

②は、神保町書店街には、半世紀以上お世話になってきた。そこに根城をもつわたしは、ときおり鹿島さんに出会う。この街の形成を、ここまで資料集成できるとは。

③は、イスラム世界についての公正な知識が欠けていた時代に、大胆な仮説を提唱した。1937年のこと。「マホメットなくして、シャルマーニュなし」と。反論も続いたが、いまでも議論すると熱くなる。

④は、日本に「中世史」を創作した張本人。封建制から荘園制まで、ヨーロッパ中世をモデルとして、初めてその反映を日本に発見した。この用語法は減じる気配がない。

⑤は、鋭い観察眼の人が、フィールドワークのさなかに、中央アジアや中

東の歴史的位置を直覚した。アジアもヨーロッパも、みな地上の生態システムに組みこんで。1950年代のこと。

菊池陽子

(東京外国語大学准教授／ラオス近現代史)

- ① 西川祐子『古都の占領——生活史からみる京都 1945-1952』 平凡社 2017年
- ② 小泉順子編『歴史の生成——叙述と沈黙のヒストリオグラフィー』 京都大学学術出版会 2018年
- ③ 石井米雄・桜井由躬雄『東南アジア世界の形成』 講談社 1985年
- ④ トンチャイ・ウイニッチャクン(石井米雄訳)『地図がつくったタイ——国民国家誕生の歴史』 明石書店 2003年
- ⑤ レイナルド・C. イレート(清水展、永野善子監修、川田牧人、宮脇聡史、高野邦夫訳)『キリスト受難詩と革命——1840-1910年のフィリピン民衆運動』 法政大学出版局 2005年

* * *

①は、記憶と膨大な未公刊資料から占領を描き、その今日的意味を問いかけており心に残った。

②は、書かれた史料に依拠する歴史研究において、書かれた歴史が正当化してきた認知の枠組みを問い直そうとする刺激的な論文集。

東南アジア史に関心を持ち始めた頃に③を読み、鮮やかに描きだされた東南アジア史像が新鮮で何度も読み返した。

④は、ベネディクト・アンダーソンが『増補 想像の共同体』でも言及している名著。国民国家タイの地理的身体が地図のなかで生まれたことを歴史的に解き明かしている。

⑤は、自ら文書を残すことが少ない民衆の歴史をいかに書くかに挑んでおり、その手法と著者の歴史観に深く感動を覚えた。

喜田浩資

(丸善ジュンク堂書店営業本部／西アジア考古学)

- ① 藤原 彰『餓死した英霊たち』 ちくま学芸文庫 2018年
- ② 亀田俊和『観応の擾乱』 中公新書 2017年
- ③ 倉本一宏『壬申の乱(戦争の日本史2)』 吉川弘文館 2007年
- ④ 羽田 正『モスクが語るイスラム史』 ちくま学芸文庫 2016年(原著中公新書1994年)
- ⑤ 藤本 強『東は東、西は西 文化の考古学』 平凡社 1994年

* * *

①は、陸軍士官として中国戦線に従軍した著者が、兵士の大半を餓死に追いやった日本軍と高級士官の責任を問う。原著は2001年に青木書店から刊行されたものだが、それを文庫の“新刊”として読んだ。このような名著が文庫化され読み継がれるのはすばらしいこと。

②は、小学生の時にNHK大河ドラマ「太平記」を見て以来、歴史という学問、そして南北朝時代に興味をもつ

た。応仁の乱より面白い。

③は、「戦争の日本史」は刊行後10年以上たった今でも棚の基本書であり続ける、息の長いシリーズ。各時代にバラバラに並べることで、棚見出しプレート代わりにする。なかでも本書は、鶴野皇女（のちの持統天皇）が黒幕であるかのような描き方をしており当時衝撃を受けた。

④は、原著は大学1年の時のイスラム史講義の教科書だった。エジプト考古学者を志していた私を隣の西アジア地域に引きずり込んだ。

⑤は、西のムギと東のコメ、人類はそれぞれが生きる自然環境に応じた文化伝統を築いてきた。アジアとヨーロッパを比較しつつ巨視的に人類史を読み解く。復刊・文庫化を求む。

北 康宏

（同志社大学文学部教授／日本古代史）

- ① 吉田 孝『続 律令国家と古代の社会』岩波書店 2018年
- ② 虎尾俊哉編『訳注日本史料 延喜式』集英社 2000～2017年
- ③ 青木和夫『日本の歴史③ 奈良の都』中央公論社 1965年
- ④ 中田 薫『法制史論集』（全4巻5冊）岩波書店 1970年（一括刊行年）
- ⑤ 福山敏男『日本建築史研究』（正統）墨水書房 1968年・1971年

* * *

①は、他界された吉田氏の第二論文集。律令国家二重構造論と図式化されがちだが、熟読してみると誠実な迷い

や試行錯誤の歩みが地層化しており、第二論集の刊行を機にあらためてその深い問題関心を咀嚼・継承していくことが求められている。

②の『延喜式』は、奈良時代の単行法令から『弘仁式』『貞観式』に至る法制をも集約した法典で、制度の動的な位相を抉り出すことができる貴重な史料である。その注釈書の完成は学界の慶事であり、総索引が付されたのもありがたい。

③は、斜に構えて詰将棋のような制度史を主張していた青木氏から否応なく滲み出る人間への温かい愛情が魅力の通史。歴史は人が主役なのだとあらためて反省させられる。

④は、戦後歴史学を生み出した母体。中田の問題関心と分析方法は、受講生の坂本太郎・石母田正・仁井田陸らを通して古代中世史に絶大な影響を与えた。今読んでも論理明快かつ刺激的である。古代史ではその私法研究の継承が不十分である。

⑤は、建築史家福山氏の若々しいエネルギーに満ちた論文集で、寺院史や美術史など古代史研究・文化史研究に資するところ大である。著作集に未収録の稀覯本で、復刻が強く望まれる。

君塚直隆

（関東学院大学教授／イギリス政治外交史・ヨーロッパ国際政治史）

- ① 河西秀哉『近代天皇制から象徴天皇制へ』吉田書店 2018年
- ② 岡本隆司『世界史序説』筑摩書房 2018年

- ③ 宮崎市定『雍正帝』 岩波書店
1950年（1996年中公文庫に収録）
- ④ 皆川達夫『中世・ルネサンスの音楽』 講談社 1977年（2009年講談社学術文庫に収録）
- ⑤ 伊藤之雄『明治天皇』 ミネルヴァ書房 2006年

* * *

①は、戦前から戦後を通じて、日本の天皇制がどうあるべきかを、学者・文化人の見解や当事者たちの動向をもとに探究した好著。

②は、ユーラシア大陸を主人公に古代から現代までを大きなスケールで描いた傑作。昨今はやりの浅薄な比較に基づくグローバル・ヒストリーとは一線を画す。

③は、評伝としても古典であるとともに、清朝中国の構造全体を教えてくれる。

④は、ヨーロッパ文化の源流にあるキリスト教とそれに基づく音楽の歴史をわかりやすく解説。西洋音楽がなぜ世界を席卷したのかがよくわかる。

⑤は、近代日本の形成をその最大の主役ともいえるべき人物の生涯を通じて明らかにした名著。

金七紀男

（東京外国語大学名誉教授／ポルトガル近世史）

- ① ルシオ・デ・ソウザ／岡美穂子
『大航海時代の日本人奴隷——アジア・新大陸・ヨーロッパ』 中公叢書 2017年
- ② J・H・エリオット（立石博高／竹

下和亮訳）『歴史ができるまで——トランスナショナル・ヒストリーの方法』 岩波現代全書 2017年

- ③ 岡本良知『十六世紀日欧交通史の研究』改訂増補 六甲書房 1942年
- ④ I・ウォーラーステイン（川北稔訳）『近代世界システム——農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立（I・II）』 岩波現代選書 1981年
- ⑤ 藤木久志『雑兵たちの戦場——中世の傭兵と奴隷狩り』 朝日新聞社 1995年

* * *

以上5点、ポルトガル、スペインに関わる史書を中心に選んだ。

①は、日本人がポルトガル商人によって世界各地に奴隷として売られていたことをメキシコやポルトガルの異端審問所の審問調書を通して明らかにしている。日本側からの資料では解明されない注目すべき研究。

②は、イギリスの近世史家が17世紀のスペイン、ヨーロッパさらには大西洋世界の歴史の構想を歴史家としての自己形成と重ねあわせて縦横に論じている。

③は、戦前に上梓された近世日欧交渉史研究の金字塔。テーマは、ポルトガルの対日貿易、日本人奴隷輸出問題等多岐にわたり、その後の日欧交渉史研究の先鞭をつけた大著。

④は、言わずと知れた近代世界システムについて論じた代表作。初期海外進出の叙述に、これまで無視されてきたポルトガルの研究が積極的に取り上

げられている。

⑤は、いわゆる「秀吉の平和」に行きつく戦国時代の戦争を英雄たちではなく名もなき雑兵たちに目を向けて、生活苦から掠奪を生業とした彼らの「食うための戦争」に着目した研究。

倉本一宏

(国際日本文化研究センター教授／日本古代史)

- ① 虎尾俊哉編『訳注日本史料 延喜式(下)』集英社 2017年
- ② 倉本一宏(監修)『日記で読む日本史(全20巻)』臨川書店 2016～2018年
- ③ 土田直鎮『日本の歴史5 王朝の貴族』中央公論社 2004年(初版1965年)
- ④ 笹山晴生『日本古代史講義』東京大学出版会 1977年
- ⑤ 石母田 正『日本の古代国家』岩波書店 1989年(初版1971年)

* * *

本当は倉本一宏『藤原伊周・隆家』(ミネルヴァ書房、2017年)を挙げたいところであるが、それは自重して、

①は、下巻の刊行によって、十七年をかけた全三巻が完結。改訂一覧や頭注・補注の索引が付く。編者の逝去後に完成したことで、改めてその人望と組織力が再認識できた。

②は、手前味噌になるが、このような学術的な基礎研究の叢書が出版できる日本という国の素晴らしさは、世界に類がない。内容も皆、新鮮。

③は、平安貴族の政治・社会・生活・

思想を、古記録を駆使して鮮やかに浮き彫りにした古典的名著。これを凌ぐ平安時代史の本は出ていない。文庫版の解説も秀逸。

④は、古代史の全般について、手際よくまとめた書。大学の教員になると、誰もがそのすごさを再認識する。出版の翌年に入学できたことの幸せをかみしめている。

⑤は、日本古代国家成立と国際的契機を連動させて論じ、また律令国家における在地首長制論を解明した必読の書。いまだにその生命は失われていない。

後藤 明

(南山大学教授／文化人類学・考古学)

- ① 小野林太郎『海の人類史——東南アジア・オセアニア海域の考古学』雄山閣 2017年
- ② 石村 智『よみがえる古代の港』吉川弘文館 2017年
- ③ 北尾浩一『日本の星名事典』原書房 2018年
- ④ 大林太良『日本神話の起源』角川書店 1961年(初版)(1990年徳間文庫に収録)
- ⑤ Witzel, Michael, *The Origins of the World's Mythologies*, Oxford University Press, 2013.

* * *

①は、アフリカを旅立ったホモ・サピエンスがアジアから太平洋へと進出する過程で、どのように海を渡り、海の資源を利用するようになったかという視点から人類史を論じた、スケール

の大きな著作である。

②は、日本の古墳時代から平安時代までの日本各地の港の実体について考古学、神話、歴史文献、そして景観シミュレーションの方法を使って多角的に論じた著作である。実際にカヤックに乗って沖に出て古墳が目視できるかどうかを確かめる部分は臨場感に満ちている。

③は、長らくこの分野は野尻抱影の独壇場の感があったが、長年、日本各地をくまなく歩き、星の名前と背景にある民俗を集めてきた著者の労作である。野尻の『日本星名事典』などを修正・補強したこの著作は、日本の文化天文学の金字塔といって過言ではない。

④は、大林の数多い神話著作の中から一冊を選ぶとしたらこれである。著者32歳の作品であり、若き日の気負いすら新鮮に感じられる一作である。とくに記紀神話冒頭の異なる性格を持つ神々を、3つの異なる集団、農耕集団、海人集団、そして司祭集団の担うものとした仮説には今なお知的興奮を禁じ得ない。

⑤は、インド古代哲学を専門とする著者が、現世人類に語り継がれた世界の神話を、古層の Gondwana 型神話と新層のローラシア型神話に分け、遺伝学や考古学の成果と対して人類拡散史を大胆に論じた著作である。ちなみに評者の『世界神話学入門』（講談社）はこの著作を、日本神話を中心に修正意見を含め、紹介したものである。

近藤和彦

(東京大学名誉教授／西洋史)

- ① 三谷 博『維新史再考』 NHK ブックス 2017年
- ② 伊東剛史・後藤はる美編『痛みと感情のイギリス史』 東京外国語大学出版会 2017年
- ③ 樺山紘一『カタロニアへの眼』 刀水書房 1979年
- ④ 立石博高編『スペイン帝国と複合君主政』 昭和堂 2018年
- ⑤ 池田嘉郎『ロシア革命』 岩波新書 2017年

* * *

じつは20年前のアンケートでも5冊の本を挙げた。その5冊は別にして、これからの歴史学の方法を示すような本に特定すると、まず①。日本史を世界史のなかで考えてきた著者は、明治の御一新を、武威から公議へ、身分制から平等へ、連邦から集権国家への近代革命としてとらえる。そのころ合衆国はようやく内戦を収めて再建を模索中、イタリア王国もカナダ連邦もできたばかり、タンジマートは改革途上、イギリスの近代的二大政党政治もこの前後から、ドイツ帝国は未成立。日本近代史はじつに世界の近代史と同期していた。②は、若い研究者たちがこんなことを問題にして、こういった史料を調べて議論しているのかと知れる論文集。痛み、苦しみ、病、憤り、悲しみ、慰め、そして信仰と科学を考察し、歴史学の方法論議にもコミットする。

③は、すでに『ゴシック世界の思想像』『シェイクスピア時代』などでオ

覚を見せつけていた30代の樺山さんが、爽やかに示した、カタルーニャ讃歌。「刀水歴史全書」の第1巻でもあった。④に代表されるように、その後のスペイン史研究もめざましい。タイトルの「帝国」という語はややこしいが、初期絶対主義ではなく、複合君主政としてのスペイン近世を問う本書は、同時にヨーロッパ国制史にも取り組む。⑤で1917年のロシア革命は社会主義共同体の始まりでなく、大ロシア民衆世界と対峙してしまった自由主義エリートの敗北・破局として描かれる。近代文明派の無力と対比されるレーニンたちの自信満々の無理押し。まるで2017年以來のトランプ劇場を見るようだ。

桜井英治

(東京大学大学院教授／日本中世史)

- ① 小川剛生『兼好法師』 中公新書 2017年
- ② 清水克行『戦国大名と分国法』 岩波新書 2018年
- ③ 笠松宏至『日本中世法史論』 東京大学出版会 1979年
- ④ 勝俣鎮夫『戦国法成立史論』 東京大学出版会 1979年
- ⑤ 良知 力『向こう岸からの世界史』 未来社 1978年

* * *

①は、『徒然草』の作者にまわりついていた俗説・謬説を一枚一枚剥がしながら真実の兼好像にたどりついた貫禄の一冊。

②は、一見無機質な分国法の分析か

ら戦国大名の人間性まであぶり出してみせる手腕が光る。どちらも本物の研究者だけが書ける気品に満ちた新書。世間の読者たちも薄っぺらな本ばかり読んでいないで、せめてこのくらいの本をベストセラーに押し上げるくらいの見識がほしいものである。

③と④は、いずれも日本中世史の名著としてすでに定評を得ているから、いまさら多言は要すまいが、その画期的な内容はもちろん、冴えわたった論理と余計なことは一切書かない文章の美学にもぜひ触れてほしい。

最後の⑤だけは、専門外からあげてみた。良知さんの本は大学院生のころ、貪るように読んだ。ものの見方といい、文体といい、どれほど影響をうけたことだろう。これもまた名著とよぶにふさわしい美しい一冊である。

桜井万里子

(東京大学名誉教授／古代ギリシア史)

- ① 森谷公俊『アレクサンドロス大王——東征路の謎を解く』 河出書房新社 2017年
- ② 神崎 繁『内乱の政治哲学——忘却と制圧』 講談社 2017年
- ③ ヘロドトス(松平千秋訳)『歴史(全3巻)』 岩波文庫 1971年～1972年
- ④ トゥーキュディデース(久保正彰訳)『戦史(全3巻)』 岩波文庫 1966年～1967年
- ⑤ カエサル(國原吉之助訳)『ガリア戦記』 角川文庫 1970年(1994年、講談社学術文庫に収録)

* * *

①は、アレクサンドロス研究の第一人者が、有能な写真家との出会いを契機に、共にイランに入り、現地踏査を敢行した結果、大王の東征ルートについての定説を覆す新説に到達する。学問的意義も高いが、旅行記としても面白い。

②は、2016年に早すぎる死を迎えられた古代ギリシア哲学の碩学による遺稿。古代から現代にいたるまで一向になくならない内乱（内戦）についての思想史。中東、アフリカの悲惨な現状に思いを馳せるとともに、アムネスティー（ギリシア語でアムネスティア〈記憶の禁止、の意〉）に希望を繋げる。

③④⑤は、古代人との対話を可能にしてくれた名著3点。これまで学び、影響を受けた歴史書は多数あって選択が難しいので、直接著者の声が聴ける3冊を。

佐々木 紳

(成蹊大学准教授／トルコ近現代史)

- ① 家島彦一『イブン・バットゥータと境域への旅——『大旅行記』をめぐる新研究』名古屋大学出版会 2017年
- ② 薮 勇造『物語 アラビアの歴史——知られざる3000年の興亡』中公新書 2018年
- ③ 伊東俊太郎『十二世紀ルネサンス』講談社学術文庫 2006年
- ④ 杉田英明『日本人の中東発見——逆遠近法のなかの比較文化史』東京大学出版会 1995年

- ⑤ アブデュルレシト・イブラヒム(小松香織・小松久男訳)『ジャポニヤ——イブラヒムの明治日本探訪記』岩波書店 2013年

* * *

①は、モロッコ生まれの大旅行家イブン・バットゥータの『大旅行記』の全訳を手がけた著者による、研究成果の集成。

②は、世界的にもまれな南アラビア古代史の専門家にして『エリユトラ海案内記』の訳者による、アラビア半島の通史。①②とも、「グローバル・ヒストリー」や「海域アジア史」などが登場するはるか以前から、現地調査と史資料分析とを組み合わせ、地域間・海域間の交流や連関を緻密に跡づけてきた研究姿勢の賜物である。

③は、中世における西欧文明とイスラーム文明との接触や融合のダイナミズムを、多彩な史料に基づきつつ平易に物語る。

④は、中東諸語や欧米諸語、さらには和漢の史書をも渉猟して日本と中東との文化的接触の瞬間を鮮やかに捉える。

⑤は、ロシア生まれのテュルク系ムスリムによる日本旅行記の邦訳。この訳業自体が、イスラーム地域研究と日本近現代史研究とのコラボレーションの、一つの好ましいあり方を示している。

設楽博己

(東京大学大学院教授／日本考古学)

- ① 山田康弘『縄文人の死生観』（角

川ソフィア文庫 角川書店 2018年 (東洋書林 2008年)

- ② 佐藤 信編『古代史講義——邪馬台国から平安時代まで』(ちくま新書1300) 筑摩書房 2018年
- ③ 山内清男『日本遠古之文化 補註付新版(昭和14年)』山内清男先史考古学論文集第1冊 先史考古学会 1967年(佐藤達夫編『山内清男集』日本考古学選集21 築地書館 1974年に再録)
- ④ 小林行雄『日本考古学概説』(創元選書218) 創元社 1951年
- ⑤ 鈴木秀夫『森林の思考・砂漠の思考』(NHKブックス312) NHK出版 1978年

* * *

縄文社会は本当に平等かといった問いかけが相次ぎ、縄文文化像再構築の機運が高まりつつある。①は、縄文人の心の問題にまで迫る快作で、縄文文化とは何か考えるヒントが満載。

②は、昨今の古代史像の見直しを15人の著者が展開した。考古学の成果が大いに役立っているのは嬉しい。

③の原典発行は、1932年だが、それまでの考古学を別の次元へと高めた科学的な方法論に基づく日本先史時代論。山内の著作はどれも味わい深く、世界史的な視野と深い洞察力に基づきまとめられた本書は小さなものだが今もなお日本考古学の著作の最高峰といつてよい。

④は、古代の技術論に秀でた小林による縄文時代～古墳時代の概説書。す

きのない美しい挿図のレイアウトに著者のセンスが光る。44回も版を重ねた不朽の名著であり、考古学を志す者必携の書。

⑤は、博覧強記の地理学者による自然環境と人とのかかわりを歴史的に読み解いた著作。環境決定論を克服する暗示に満ちている。

芝 健太郎

(フタバ図書商品部 バイヤー／西洋史)

- ① 松村圭一郎『うしろめたさの人類学』 ミシマ社 2017年
- ② 清水克行『戦国大名と分国法』 岩波新書 2018年
- ③ 宮本常一『忘れられた日本人』 岩波文庫 1984年
- ④ 阿部謹也『ハーメルンの笛吹き男』 ちくま文庫 1988年
- ⑤ アンドルー・ゴードン『日本の200年』 みすず書房 2006年(新版2013年)

* * *

①は、エチオピアでのフィールドワークを通して、「うしろめたさ」が世の中に溢れる不均衡を正していくキーワードになると説く。その真摯さに心を打たれる。

②は、戦国大名が立てた国内法である分国法に焦点をあてる。結城政勝の愚痴の多い法文や家臣から分国法を立てるように迫られた六角氏など従来の戦国大名のイメージを覆す。

③は、山口周防大島の民俗学者の名著であるが、自分自身、幼きころの祖父母や地域の古老の言葉や姿を思い出

す。失われつつある日本の姿を全国を旅をし、自らの足で歩いて記録を残した著者の問題意識はいまも受け継がれる。

④は、は当時の人々の暮らしを丁寧に追うことで伝説の裏に隠された中世の差別を明らかにしていく。歴史学の面白さを教えてくれる。

⑤は、徳川時代後期から現代までを俯瞰して記述。維新前後、戦前戦後などの時代区分ではない新鮮さに衝撃を受けた。

清水克行

(明治大学商学部専任教授／日本中世史)

- ① 桜井英治『交換・権力・文化——ひとつの日本中世社会論』 みすず書房 2017年
- ② 吉田 孝『続 律令国家と古代の社会』 岩波書店 2018年
- ③ 笠松宏至『日本中世法史論』 東京大学出版会 1979年
- ④ 勝俣鎮夫『戦国時代論』 岩波書店 1996年
- ⑤ 藤木久志『村と領主の戦国世界』 東京大学出版会 1997年

* * *

ここに挙げた5冊の本はそれぞれ余人には真似のできない独自の世界を作りあげており、ページをめくれば、さながら多彩なテーマパークのように、いつも私を心地よい歴史の疑似体験に誘ってくれる。

①は、贈与・貨幣・信用という問題群に歴史学の立場から斬り込んだ野心作。既存の学問の枠組みに安住せず、

新たな地平を切り拓こうという姿勢が魅力だ。

②は遺稿集だが、著者は中世史研究者がいちばん知りたいイエヤムラ、法の来歴を最も明快に解き明かしてくれた古代史研究者だと思う。

③の著者は、中世人の心に寄り添う繊細な感性と、それを明晰な論理で解き明かす技術を持ち合わせた類まれな研究者。読み返すたびに感嘆の溜息が出る。

④は、「日本史の転換点」としての戦国時代の重要性を世に知らしめた画期的な著作。

⑤は、「習俗」に注目することで戦国の民衆生活の実態を再現。方法論の点でも視座の点でも、私自身が最も大きな影響をうけた研究書。

5冊いづれも、読むたびに「いつの日か私もこのような研究を成し遂げてみたい」という初心を思い起こさせてくれる。

下垣仁志

(京都大学准教授／考古学)

- ① 小澤実編『近代日本の偽史言説』 勉誠出版 2017年
- ② 関雄二編『アンデス文明』 臨川書店 2017年
- ③ 真木悠介『時間の比較社会学』 岩波書店 1981年
- ④ E.H. カー『歴史とは何か』 岩波書店 1962年
- ⑤ 柳田國男『明治大正史 世相篇』 中央公論新社 2001年

* * *

①は、近代日本の偽史言説の構造と生成背景を、多角的にとりあげた論集。同種の問題意識から考古学の偽史／正史を掘り起こそうとしている自分にとって、たいへん刺戟に富む。

②は、アンデス文明の特質を多面的なアプローチで解き明かす。特定のフィールドに腰をすえる粘り強さこそが、研究の深みを醸成することを教えてくれる。

③は、近代以降の時間意識の存立構造をさぐり、非近代社会の時間意識との比較をつうじて、現在社会の隘路からの脱出を提言する。透徹した論理を不思議な透明感がつつみこんだ雰囲気なたまらない。

④は、あえて説明の要がない名著中の名著。今回読み直して気になったのが、「歴史的事件の絶頂でなく、その谷底を進んで行く集団や国民にあっては、歴史におけるチャンスや偶然を強調する理論が優勢になる」との言。

⑤は、「現代生活の横断面」だけからでも歴史叙述が可能なことを示す。「考古嫌い」で知られる柳田だが、考古学にとって重要な観点に満ちている。

新藤 透

(東北福祉大学准教授／日本近世史・図書館情報学)

① 木村裕俊『道南十二館の謎』北海道出版企画センター 2017年

② 横田冬彦『日本近世書物文化史の研究』岩波書店 2018年

③ 伊東多三郎『幕藩体制』弘文堂

アテネ文庫 1956年

④ 中村孝也『家康伝』講談社
1965年

⑤ 中田易直『近世対外関係史の研究』
吉川弘文館 1984年

* * *

①は、良質な史料がないため「不毛」と言われている中世北方史の研究書である。木村氏は道南十二館の考古学の成果と各館主の系譜類を、松前氏が著した「正史」である『新羅之記録』の記述と対比する研究をやられた。

②は、近世書物文化史研究をリードしてきた横田氏の最新論文集で、教えられる点が多い。

③は、研究が進み内容が古くなってしまった部分もあるものの、これほど簡潔に且つ要点を漏らさずに分かりやすい文章で書かれた幕藩体制の入門書を筆者は知らない。研究史を理解する上でも最初に読むべき一冊。

④は、生涯をかけて徳川家康を歴史的に追求した中村氏の代表的著作で、700頁を超える大作。実証性の高い本格的な研究であり、家康伝記の最高峰でもある。『家康の族葉』、『家康の臣僚 武将篇』、『家康の政治経済臣僚』も揃えると家康周囲のことはよくわかる。

⑤は、戦後の近世対外関係史研究を牽引した中田氏の博士論文で、研究の集大成である。中田氏は朱印船制度家康創設説を本書で主張し、豊臣秀吉創設説の岩生成一氏と論争を繰り広げた。

末木文美士

(国際日本文化研究センター名誉教授／仏教学)

- ① 大塚紀弘『日宋貿易と仏教文化』吉川弘文館 2017年
- ② 藤田和敏『近代化する金閣——日本仏教教団史講義』法藏館 2018年
- ③ 黒田俊雄『日本中世の国家と宗教』岩波書店 1975年
- ④ 大桑 斉『寺檀の思想』教育社 1979年
- ⑤ 吉田久一『日本近代仏教史研究』吉川弘文館 1959年

* * *

仏教史の分野は、かつてはほとんど日本史研究者によって占められていたが、近年は、仏教学・文学・宗教学など、多分野の研究者が加わり、複合的な研究が進められている。喜ばしいことだが、歴史学独自の展開が弱くなった感もある。

中世仏教を東アジア交流史の中に位置づけるという視点は、村井章介氏らによって確立されたが、①は、その流れを受けた最新の成果。重源入宋説の否定など、議論を呼ぼう。近世・近代仏教史は胎動期にあり、近年の進展は著しい。②は、着実な寺院史研究を踏まえながら、広く仏教教団史へと視野を広げ、近世から近代へと大きな流れを描き出した。

③～⑤は、中世・近世・近代仏教史に関して、今日の研究の基盤を作った名著で、私自身多大の影響を受けた。中世に関しては、③の壮大な構図は、

いまだに色褪せない。近世に関しては、幕藩体制と仏教の関係に新しい視点を導入した④は刺激的だった。⑤は今日の近代仏教史研究の隆盛につながる最初の記念碑的著作。

鈴木 淳

(東京大学教授／日本近代史)

- ① 武田晴人『異端の試み——日本経済史研究を読み解く』日本経済評論社 2017年
- ② 千田武志『呉海軍工廠の形成』錦正社 2018年
- ③ 石井寛治『日本蚕糸業史分析』東京大学出版会 1972年
- ④ 有泉貞夫『明治政治史の基礎過程——地方政治状況史論』吉川弘文館 1980年
- ⑤ 沢井 実『マザーマシンの夢——日本工作機械工業史』名古屋大学出版会 2013年

* * *

①は、近代日本を対象とする経済史研究の主要著書を学生とともに読み解いた記録と、著者の研究履歴からなり、伝統的な日本経済史研究の成果が凝縮された一冊である。

②は、長年地方史編纂に従事してきた著者が呉海軍工廠の形成史を海軍造船・造兵、労働、地域との関係など多角的に、徹底した史料調査に基づいて描き、日露戦争以前だけを扱いながら700頁を越える大著である。

③は、蚕糸業研究の古典であるが、製糸業の発展、そこでの労働、さらには養蚕を全国的に通観する点で半世紀

読書アンケート

近くたってもこれを凌ぐ著作はない。

④は、山梨県に即した研究であるが、実証研究に基づいて明確に提示された地方制度と政党に関する理解は、双方の研究が深まった今日でも、先ずは参照すべきものである。

⑤は、30年以上にわたる研究の集大成であり、目配りの良さと、初期の個別論文を大幅に改訂増補して収録している姿勢から、この分野の決定版といえる著書となっている。

鈴木靖民

(横浜市歴史博物館館長／日本古代史)

- ① 瀬川拓郎『縄文の思想』講談社現代新書 2017年
- ② 李成市『闘争の場としての古代史』岩波書店 2018年
- ③ 江上波夫『騎馬民族国家』中央公論新社 1991年
- ④ シャルロット・フォン・ヴェアシュア『モノが語る日本対外交易史』藤原書店 2011年
- ⑤ 石母田 正『日本の古代国家』岩波書店 2017年

* * *

①は、近年擦文文化、アイヌ文化の考古学の成果を相次いで公にする著者が、アイヌの先祖の縄文人の文化、思想をたどって列島人の原思想を明らかにし、神話、伝説、芸能、習俗からアイヌ・海民・南島とつながるネット形成に迫る斬新な縄文論。

②は、近代以降の古代史研究は思想同士の闘いの場だという石母田正の言に奮い立って以来、一国史観の克服の

ために国民国家の隘路をどう超えるかを問い続ける、著者の現時点での集成。

③は、1948年、センセーショナルな議論を巻き起こした騎馬民族征服王朝説を、アジア規模に広げてアプローチした日本古代史論。古い独自の説だが、公共歴史学の先駆けとして再注目。

④は、7～16世紀の日本史を中国との交流を示すモノ資料によって通観する初の画期的業績。アナル学派の影響を受けたヨーロッパ人研究者の拓いた新たな地平。

⑤は、古代国家の形成と構造の全体枠組みを、対外関係、王権、首長制の仮説を含めて提示した1971年の名著の文庫化。解説も平明。これに比肩するまとまった国家論はまだない。

関根達人

(弘前大学教授／日本考古学)

- ① 山田康弘編『歴博フォーラム 縄文時代』吉川弘文館 2017年
- ② 中井 均・加藤理文編『近世城郭の考古学入門』高志書院 2017年
- ③ 今村啓爾『縄文の実像を求めて』吉川弘文館 1999年
- ④ 鈴木公雄『考古学入門』東京大学出版会 1988年
- ⑤ 速水 融『歴史人口学で見た日本』文春新書 2001年

* * *

①は、昨今のイメージ先行のJomonブームとは一線を画す縄文時代の本質を問う書で、研究の最前線で何が議論されているかがよく分かる。

②は、近年各地で地域おこしのシン

ボルとして注目が集まるお城を考古学の視点から多角的に解説しており、お城の新たな魅力に気づかせてくれる。

③は、三内丸山遺跡などの調査から作られた「豊かな自然と共生した縄文」のイメージに対して、考古学データに基づき、“等身大の縄文像”が提示されている。

④は、考古学とはどのような学問なのか、具体的な研究事例を取り上げつつわかりやすく解説した入門書。

⑤は、日本の歴史人口学の第一人者が研究成果をまとめており、この1冊でその神髄に触れられる。

曾根勇二

(横浜都市発展記念館職員／日本近世史)

- ① 川戸貴史『中近世日本の貨幣流通秩序』 勉誠出版 2017年
- ② 井上泰至編『関ヶ原はいかに語られたか』 勉誠出版 2017年
- ③ 北島万次『豊臣秀吉の朝鮮侵略』 吉川弘文館 1995年
- ④ 永原慶二『戦国期の政治経済構造』 岩波書店 1997年
- ⑤ 林基『松波勘十郎搜索(上・下)』 平凡社 2007年

* * *

私自身、以前から日本列島の内陸部と臨海部の支配関係から、伏見と大坂を拠点とする秀吉政権の画期性を見出し、朝鮮出兵の必然性を解明している。物流支配の実態からの政権論であるが、③を抜きには現在の秀吉研究は理解できない。④は古代・中世以来の内陸部の重要性を説き、近世での臨海部

の展開まで見通す名著。榎原雅治『中世の東海道をゆく』(中公新書、2008年)も同様の視点で、網野善彦氏の仕事と比較すると面白い。⑤も近世社会の物流支配の重要性に注目する。秀吉・家康政権の鉱山支配の背景に「銀遣い経済圏」の問題があるが、①には国内の東国・西国論や東アジア論も期待したい。②は国文学研究者らの政権論で、秀吉・家康段階の動向が江戸時代の社会に与えた影響を紹介。

平 雅行

(京都学園大学特任教授／日本中世史・古代中世仏教史)

- ① 島津毅『日本古代中世の葬送と社会』 吉川弘文館 2017年
- ② 佐藤文子『日本古代の政治と仏教——国家仏教論を超えて』 吉川弘文館 2018年
- ③ 家永三郎『日本思想史学の方法』 名著刊行会 1993年
- ④ 戸田芳実『日本領主制成立史の研究』 岩波書店 1967年
- ⑤ 黒田俊雄『日本中世の国家と宗教』 岩波書店 1975年

* * *

①は、葬送史研究を塗りかえる労作。葬送における僧侶と俗人との分業構造に着目して、その歴史の変遷を解明。ケガレ論への安易な依存を排したパワーのある実証は、非人研究にも大きな影響を与えるはずだ。

②は、古代国家における得度の一元的管理を否定し、得度の多様な実態を精査。この成果を中世仏教論にどのよ

読書アンケート

うに接続させるかが、今後、問われよう。

③は、戦後直後、あるべき思想史を模索した論考を取録。あらゆる事象に意識が関与している以上、広義の思想史はすべての歴史領域を考察する全体史でなければならず、一切の分科史の主体的側面を統括する、との提言は重い。

④は、領主制論の名著。特に自然の開発が人間自身の開発でもあるという観点から、中世文化の形成を論じた論考は非常に独創的。今も学ぶ点は数多い。

⑤は、権門体制論・顕密体制論を提起した古典の名著。その構想の根幹は今や中世史の常識となった。その後の学説の展開を、本書に立ち返って検証する作業は今後も必要となるはずだ。

高尾善希

(三重大学准教授／日本近世史)

- ① 原田実『オカルト化する日本の教育』ちくま新書 2018年
- ② 高橋昌明『武士の歴史』岩波新書 2018年
- ③ 山田雄司『忍者の歴史』角川選書 2016年
- ④ 中村政則『日本の歴史 29 労働者と農民』小学館 1976年
- ⑤ 竹内洋『日本の近代 12 学歴貴族の栄光と挫折』中央公論新社 1999年

* * *

①は、厳密には歴史書ではないかもしれないが、現代の“とんでも”歴史

教育の問題点とその発生の構造を指摘した書。現代社会と「歴史」という部分は、いままでアプローチする著書がまったくなかった。

②は、武士の発生について、通説に異論をとなえている。また、クールジャパン文脈での「サムライ」との付き合い方についても、再考を迫る。

③は、高尾の職場の同僚の著書であるが、実証的な忍者の通史をはじめて示した。忍者の実像と虚像とを示し、忍者像の時代的変遷をも論じた好著。忍者学が思想史／日本人論になりうる可能性を示した。

④は、聞き取りから近代の民衆史を叙述した意欲作。単純に民衆の敗北／勝利に分けない議論は、感動的である。

⑤は、近代の学歴と教養主義の歴史的展開を示した。近代史の基礎的知識として押さえておきたい著書。同じ著者による『立身出世主義——近代日本のロマンと欲望』（世界思想社、2005）・『教養主義の没落——変わりゆくエリート学生文化』（中公新書、2003）なども併読したい。

高岸 輝

(東京大学大学院准教授／日本美術史)

- ① 桜井英治『交換・権力・文化——ひとつの日本中世社会論』みすず書房 2017年
- ② 有賀祥隆『日本絵画史論攷——紺丹緑紫抄』中央公論美術出版 2017年
- ③ 横井 清『看聞御記——「王者」と「衆庶」のはざまにて』そしえて

1979年

- ④ 東京国立博物館、国華社、朝日新聞社『室町時代の屏風絵——「国華」創刊100年記念特別展』朝日新聞社 1989年
- ⑤ 米倉迪夫『源頼朝像——沈黙の肖像画』平凡社 1995年（2006年、平凡社ライブラリーに収録）

* * *

美術史および周辺領域から5冊。

①所収の「御物の経済」（初出2002年）は、足利將軍家周辺の美術品流通と経済的価値を明らかにし、その後のコレクション研究に大きな影響を与えた。仏画研究の泰斗による②は、作品観察と様式分析の緻密さにおいて美術史の範とすべき方法を示す。

『室町時代の一皇族の生涯』（講談社学術文庫、2002年）として再刊された③は、記主・貞成親王の起伏に富んだ人生と、その美術や芸能に対する飽くなき興味を活写し、中世日記から文化を読み解く醍醐味を教えてくれる。

④は、展覧会カタログの名著。1970年から80年代に再発見された「やまと絵屏風」を一堂に会し、水墨画と並べることによって室町絵画の多面性を知らしめた展示で、カタログ所収の大家による論考と若手の作品解説は30年経た現在もその価値を失わない。

神護寺蔵「伝源頼朝像」の像主を足利直義とする⑤の結論は、画的であり、隣接分野との議論を誘発した点も重要。

高田貫太

（国立歴史民俗博物館准教授／考古学）

- ① 『日本古代交流史入門』 勉誠出版 2017年
- ② 山本孝文『古代韓半島と倭国』 中央公論新社 2018年
- ③ 山尾幸久『古代の日朝関係』 塙書房 1989年
- ④ 李成市『東アジアの王権と交易』 青木書店 1998年
- ⑤ 村井章介『中世倭人伝』 岩波新書 1993年

* * *

①は、古代日本をめぐる交流史を37名もの研究者が論じる。東アジア世界の様々な主体が織りなす交流が、古代日本の社会・文化の展開に長期にわたり作用しつづけたことを実感できる。

②は、とかく現代的で政治的な解釈に陥りやすい古墳時代の日朝関係史研究の課題を冷静に指摘し、その解決の糸口は多様な交流の実態を丹念にひも解くことと説く。

③は、1970年代まで古代日朝関係史の通説であった「ヤマト王権の朝鮮支配」説の架空性を論証し、東アジア世界との外的接触の中で進む古代日本の社会統合の実態を描きだす。

④は、7～9世紀の対外関係史における「遣唐使偏重史観」を批判し、東アジア情勢の変化の中で新羅や渤海、そして古代日本が政治戦略的に交易を重ねるさまを浮き彫りにする。

⑤は、国境を往来しながら境界性を帯びる人びとや倭人居留地「三浦」の

読書アンケート

盛衰に焦点を定め、15、16世紀の日朝の境界領域に表出したきわめて濃密で混沌とした交流の姿を描く。

高橋典幸

(東京大学准教授／日本中世史)

- ① 桜井英治『交換・権力・文化——ひとつの日本中世社会論』みすず書房 2017年
- ② 小川剛生『中世和歌史の研究——撰歌と歌人社会』塙書房 2017年
- ③ 石井 進『中世武士団』講談社学術文庫 2011年
- ④ 佐藤進一『日本中世史論集』岩波書店 1990年
- ⑤ 川合 康『鎌倉幕府成立史の研究』校倉書房 2004年

* * *

①は、贈答儀礼が極度に発達して市場経済に最接近し、贈与を媒介にした信用経済すら成り立っていた日本中世社会を描き出す。一方でその限界も示唆され、単純な進歩史観に警鐘を鳴らす点も見逃せない。

②は、正統な国文学の研究書であるが、中世の公家や武家の身分秩序について、重厚で体系的な議論を展開する。「国文」「日本史」といった垣根を忘れさせる一書である。

③は、1970年代に刊行された通史シリーズの1冊であるが、武士に関する著者の豊かな知見、武士にアプローチするための様々な手法が示されていて、今なお読みごたえがある。

④は、戦後の中世政治史を牽引してきた著者の研究の精華が収められてい

る。史料からどのようにして政治制度や政治過程を紡ぎ出していくか、実証研究のお手本である。

⑤は、④を意識しつつ、政治や制度を新たな視角で捉え直すことを試みる。とくに地頭制度の成立について画期的な見解が示される。今後必ず参照されるべき一書である。

瀧井一博

(国際日本文化研究センター教授／法制史・国制史)

- ① 三谷 博『維新史再考——公議・王政から集権・脱身分化へ』NHK出版 2017年
- ② 佐藤卓己『ファシスト的公共性——総力戦体制のメディア学』岩波書店 2018年
- ③ 上山安敏『神話と科学——ヨーロッパ知識社会 世紀末～20世紀』岩波書店 1984年
- ④ モードリス・エクスタインズ『春の祭典——第一次世界大戦とモダン・エイジの誕生』TBSブリタニカ 1991年(2009年 みすず書房より新版)
- ⑤ ティモシー・スナイダー『ブラックアース——ホロコーストの歴史と警告(上・下)』慶應義塾大学出版会 2016年

* * *

ホイジンガが『中世の秋』のなかで活写してくれたように、歴史家とはその時代の生活と精神性に内在し、人々の喜びと悲しみの全体像を提示できる人の謂いである。Bに挙げた3冊はい

ずれも 20 世紀前半をテーマにした歴史家の偉業である。残念ながら、そこから読み取れるのは専ら悲しみと苦しみであるが。A の 2 冊は、歴史的実証分析から社会科学的歴史認識へのステップアップを指し示している。

竹内 亮

(花園大学講師／日本古代史)

- ① 小倉慈司・三上喜孝編『国立歴史民俗博物館研究叢書 4 古代日本と朝鮮の石碑文化』朝倉書店 2018 年
- ② 遠藤慶太・河内春人・関根淳・細井浩志編『日本書紀の誕生——編纂と受容の歴史』八木書店 2018 年
- ③ 上代文献を読む会編『上代写経識語注釈』勉誠出版 2016 年
- ④ 小林真由美・北條勝貴・増尾伸一郎編『寺院縁起の古層——注釈と研究』法藏館 2015 年
- ⑤ 栄原永遠男『正倉院文書入門』角川学芸出版 2011 年

* * *

近年刊行された日本古代史料に関する著作・史料注解 5 編を選んだ。

①は、日韓両国の古代石碑に関する論考と釈文集成を掲載。国立歴史民俗博物館図録『古代の碑』は入手困難となって久しく、今後は本書が古代石碑釈文の定番となろう。

②は、近年長足の進歩を遂げた日本書紀の成立・伝来・内容などに関する成果を集成。巻末の研究文献目録には各論文の寸評も付され、至便。

③は、古代写経の識語を能う限り集成し逐語釈を加える。念入りな要語索

引も付す。今後の古写経研究は田中埴堂編『日本古寫經現存目録』と本書が基礎史料となろう。

④は、「放光菩薩記」「大神宮法華十講会縁起」「龍門寺縁起」「六角堂縁起」「大雲寺縁起」「西琳寺文永注記」などの寺院縁起を翻刻、注釈を加える。評者には「西琳寺…」がありがたい。

⑤は、複雑を極める写経所文書の現状から原態を復原し、奈良時代写経事業の実相を解明するための実践的研究手順を示す。工具書の使い方なども含め、行き届いた入門書。

谷本晃久

(北海道大学教授／日本近世史)

- ① 奈倉哲三ほか編『戊辰戦争の新視点 (上・下)』吉川弘文館 2018 年
- ② 小内 透編『現代アイヌの生活と地域住民』東信堂 2018 年
- ③ 北方言語・文化研究会編『民族接触——北の視点から』六興出版 1989 年
- ④ 藤木久志『雑兵たちの戦場——中世の傭兵と奴隷狩り』朝日新聞出版 2005 年 (初版 1995 年)
- ⑤ 佐々木利和『アイヌ史の時代へ——余瀝抄』北海道大学出版会 2013 年

* * *

①・②は、現在の問題関心に即して印象深い本。①には、今後の研究の指針が豊かに鏤められている。上巻に収められる在外史料の素材化と活用は貴重な成果。

②は、今を生きるアイヌの方々の意

読書アンケート

識や生活環境に関する社会的・政策的な論点を多面的に取り上げた一書。歴史叙述には同時代的課題をどう受け止めるのかが絶えず問われている。

③～⑤は、筆者の乏しい研究履歴の中で、心に残っている本。③は、近世北方史の勉強を始めた頃に影響を受けた一冊。地に足の着いた学際的な研究の可能性に魅了された。

④は、修士論文に呻吟していた頃に出会った一冊。「稼ぎ場」概念など通説に捉われぬ着想と叙述に励まされた。

⑤は、文字通りの座右の書。所収の各論文から、文献史学の手法でアイヌ史を描き出していく心がまえと実証的な方法論とをどれほど学んだことか。

鶴島博和

(歴史家/歴史)

「印象」を語り、「推薦」出来るほどの読書家ではないので、A. 歴史学の現在と未来を考える上で印象に残ったもの、B. 私の「現存」に影響を与えた書籍について言及したい。

A.

① パトリック・マニング (南塚信吾・渡邊昭子監訳) 『世界史をナビゲートする——地球大の歴史を求めて』 彩流社 2017年

② 岡本隆司 『世界史序説』 ちくま新書 2018年

B.

③ マックス・ウェーバー (世良晃志郎訳) 『支配の社会学——経済と社会 (I・II)』 創文社 1960年、19

62年

④ オットー・ブルンナー 『ヨーロッパ——その歴史と精神』 岩波書店 1974年

⑤ 青山吉信 『アングロ＝サクソン社会の研究』 山川出版社 1974年

* * *

①は、ヨーロッパの歴史家たちの視点や言説に慣れ親しんできた私にとって、アメリカの歴史家の視点や言説そして研究者の交友範囲を知る上で新鮮であったし、大学院生の教育方法を考える上で大なるものがあつた。研究者にはならないが、生涯、歴史を専門としたいという歴史家養成にとって、教育方法論と手法の確立は急務である。

②は、その「世界史大」の歴史を構築するための多様なパースペクティブをとっていくためには必要な本である。

③と④は、原書と突き合わせて、時間をかけて読み進めてきた本。歴史の研究を行うさいに、分析概念(理念型)と「史料上の言葉とどう向き合うか」という対象概念の構築(概念史)を考える基礎となった。そして、⑤大学3年の夏休みをこの本に費やしたことが、私の専門領域を決定したといっても過言ではない。著者の史料に対する真摯な態度はお手本である。

外岡慎一郎

(奈良大学教授/日本中世史)

① 春田直紀編 『中世地下文書の世界』 勉誠出版 2017年

② 桜井英治 『交換・権力・文化』 みすず書房 2017年

- ③ 佐藤進一『新版古文書学入門』
法政大学出版局 1997年
- ④ 黒田俊雄『歴史学の再生』校倉
書房 1983年
- ⑤ 網野善彦・石井進『米・百姓・
天皇』大和書房 2000年（2011
年、ちくま学芸文庫に収録）
- * * *

①②はともに、日本中世の社会構成、文化構造の究明に新地平を拓いた作品である。それぞれ読んで、価値、権力をめぐる文書と銭貨の機能—あるいは親近性、さらには人類社会における文書と銭貨の存在意義について改めて考える機会を得た。

③④⑤は座右の書からの3冊。

③は、教室で講じる古文書学のテキストとして万全であるばかりか、文献史学の奥義書でもある。今もページを開くたびに教えられ、新たな発見がある。

④は、学生時代に読んで感銘をうけた。歴史への向き合い方、研究者の覚悟について多くを学び、今も折に触れ読み返している。

⑤は、日本という国のかたちを理解するには格好の書。対談という形式をとりながらも、一篇の論文を読むような感覚で読める。高校日本史を卒業したらまずこの本を読みなさいと伝えたい一冊である。

永田雄三

（東洋文庫研究員／トルコ史）

- ① 小田中直樹・帆刈浩之編『世界史
／いま、ここから』山川出版社

- 2017年
- ② 岡本隆司『世界史序説——アジア
史から一望する』ちくま新書
2018年
- ③ 井筒俊彦『アラビア思想史』博
文館 昭和16年
- ④ 前嶋信次『玄奘三蔵——史実西遊
記』岩波新書 1952年
- ⑤ 伊東俊太郎『12世紀ルネサンス
——西欧世界へのアラビア文明の影
響』岩波セミナーブックス 1993
年
- * * *

①と②は、近年の世界史ブームのなかで、西洋中心史観の克服の試みに位置づけられる。

①は欧米、西アジア、東アジアを基本的地域区分として、各地域を等しく扱っている点が斬新である。

②は、中央ユーラシアの遊牧国家論とヨーロッパの歴史として唯一つとり上げられたイギリスの歴史との対比が鮮やか。

③は日本が世界に誇るイスラム学者・思想家である著者が弱冠27歳で出版した著作で、戦前イスラム研究の最高水準を示す古典。1991年にその後の研究が付け加えられて、『イスラム思想史』（中公文庫）として再版されている。

④は、日本のイスラム史の大先達による中国原典を読みこんだ玄奘の伝記。とくにインドへの旅の苦難の様子が伝記文学ともいえる格調の高い名文でつづられ、いまなお版を重ねて読み継がれている。

⑤は、ハスキンズによる同名の著書がヨーロッパ文明の内的展開に重点を置いているのに対して、本書は、ラテン語およびアラビア語原典の徹底した分析によってアラブ・イスラム文明の西洋への影響の大きさを論じたもの。いわゆる「ルネサンス」理解にも新しい境地を開いた意義は大きい。

七海雅人

(東北学院大学文学部教授／日本中世史)

- ① 峰岸純夫『享徳の乱——中世東国の「三十年戦争」』講談社選書メチエ 2017年
- ② 高橋昌明『武士の日本史』岩波新書 2018年
- ③ 小林清治・大石直正編『中世奥羽の世界』(UP選書) 東京大学出版会 1978年
- ④ 千々和 到『板碑とその時代——てちかな文化財・みぢかな中世』平凡社 1988年
- ⑤ 佐藤進一『鎌倉幕府訴訟制度の研究』岩波書店 1993年

* * *

①著者の研究の集大成といった内容です。東国史・地域史・新田岩松氏をキーワードに、戦国時代へ移りゆく社会のあり様が、鮮やかに再構成されました。八犬伝の名場面芳流閣の決闘を描く錦絵を採用したカバーデザインも印象的です。

②武士論をリードしてきた著者の、決定版ともいえる武士の通史が上梓されました。博覧強記、ぐいぐいと迫ってくる文章の力には、いつも魅了され

るばかりです。

③政治制度史をふまえた奥羽中世史の様相は、本書によって明らかされたといえます。私にとって、生涯の座右の書となりました。ここに示された歴史像をどのように乗り越えていくのか、日本史研究における大切な課題の一つだと思います。

④板碑をつくり供養した人々に焦点をあてて描かれた板碑の通史です。「本当に金石文が有効なのは、実は他の史料と結びついた時なのではないだろうか」という一節が、研究の道しるべになりました。

⑤ゼミの先生に紹介され、図書館から借り出して一気に読んだザラ紙の本(戦後、目黒書店刊行本)が、学術研究に触れた原体験です。史料から話の筋を導き出していく方法論、具体的な史料操作の展開は、まるで魔法のように思えました。

仁藤敦史

(国立歴史民俗博物館教授／日本古代史)

- ① 若狭 徹『前方後円墳と東国社会古墳時代』(古代の東国1) 吉川弘文館 2017年
- ② 鈴木靖民・金子修一・田中史生・李成市編『日本古代交流史入門』勉誠出版 2017年
- ③ 津田左右吉『日本古典の研究(上)』(津田左右吉全集1) 岩波書店 1963年
- ④ 石母田正『日本の古代国家』岩波書店 1971年
- ⑤ 佐伯有清『新撰姓氏録の研究(全

10巻)』 吉川弘文館 1962～2001年

* * *

①は、古墳時代の東国社会を考古学的手法により概観したもの。群馬県の古墳の調査に長年携わった著者により、関東各地の古墳や遺物が丹念に読み解かれ、東国古墳社会の実態に迫った力作と評価される。

②は、近年盛んになった対外関係史をさまざまな角度から分析した書。最先端の研究状況を知るためには必読の書といえる。日本列島の内部に閉じこもらず、東アジアや東部ユーラシアという広い視野により、列島の歴史を相対化してくれる。

③は、記紀批判の方法について語った古典的名著。内在的批判と外在的批判の併用、外国史や金石文との比較など、現在でも十分通用する重要な方法的提言がなされている。

④も、言わずと知れた古典的名著である。在地首長制を論じた第四章のみに注目が集まることが多いが、1970年代までの古代研究を総括し、弁証法的に論じる語り口に魅了された研究者も多い。

⑤は、「考証編」が学士院賞を受賞した実証的名著。長年にわたる古代氏族研究の悉皆的な考証は他の追従を許さないもので、大化前代から平安初期に至る氏族研究のレベルを飛躍的に高めた著作と評価される。

根井 浄

(肥前島原松平文庫長・元龍谷大学教授／日本宗教文化史)

① 安高啓明『踏絵を踏んだキリシタン』 吉川弘文館 2018年

② 圓教寺叢書編集委員会・吉田扶希子『圓教寺奥之院——開山堂と護法堂』 集広舎 2018年

③ 赤松俊秀『平家物語の研究』 法藏館 1980年

④ 梅津次郎『絵巻物叢考』 中央公論美術出版 1968年

⑤ 外山幹夫『中世長崎の基礎的研究』 思文閣出版 2011年

* * *

①は、耳慣れた「踏絵」に本格的なメスをいれた歴史書。著者は法制史に興味があるのだろう。気鋭の学者として論証や文章の切れ味も良い。キリシタン史に一石を投じている。

②は、性空上人ゆかりの播磨国圓教寺の総合的調査研究かつ入門書。オールカラーの美観書で読みやすく、改めて圓教寺の歴史研究の深遠さを感じ入った。

③は、歴史学者として『平家物語』の原本研究を提唱した晩年の研究成果。一対一で講義を受けた思い出の書と共に、文献実証主義をたたき込まれた座右の書籍。

④は、日本美術史学界に「説話画」なる分野を開拓した名著。現行の絵解き研究も著者による先駆的な業績の上に成り立っていることを忘れてはならない。「実証的な基礎に立たない発言は無意味だろう」という教えは、指導

読書アンケート

を受けた私の研究姿勢を支えている。

⑤は、肥前有馬氏の拠点・原城を含む戦国期研究の重要書。同『肥前有馬一族』（新人物往来社／1997年）も、世界遺産登録を行っていた当該地を再考する機会に一読する価値がある。

橋本 雄

（北海道大学准教授／中世日本国際交流史）

- ① 北島万次『豊臣秀吉朝鮮侵略関係史料集成（全3巻）』平凡社 2017年
- ② 琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究会編『琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究』思文閣出版 2018年
- ③ 小葉田 淳『中世日支通交貿易史の研究』刀江書院 1941年（復刊1969年）
- ④ 村井章介『アジアのなかの中世日本』校倉書房 1988年
- ⑤ 桜井英治『室町人の精神』講談社・日本の歴史12 2001年（学術文庫版2009年）

* * *

①は、著者畢生の作品にして、遺作となってしまった史料集。膨大な関係史料に丁寧な訳注を施し、戦争の実態をあぶり出す。朝鮮王朝実録の会読に臨む北島氏の熱意を思い出すと、自身の怠惰が恥ずかしく思えてくる。

②は、全国の好事家たちが那覇に集まって絵解きを共同で行なってきた成果本。表題に関する絵画史料を大判で提供する、待望の書！ 旗振り役の藤田励夫氏・外間政明氏の奮闘が結実し

た。

③は、今なお多くのヒントを提供してくれる快著。卒論の貨幣史も凄かったが、戦前にこの水準が達成されていたことに、嘆息するばかり。

④は、史料解釈の難しさ・面白さ、スケールの大きな歴史像の提示に圧倒される。対外関係史研究史上、珠玉の著である。

⑤は、社会史の話かと思えば経済史へ、やがて政治史、文化史へ遷りつつ、室町社会のすべてを展望させてくる。著者の妙技とセンスが光る通史で、敢えて類書を捜せば、岡本隆司『近代中国史』（ちくま新書 2013年）が挙げられようか。

幡鎌一弘

（天理大学教授／日本宗教史）

- ① 桜井英治『交換・権力・文化——ひとつの日本中世社会論』みすず書房 2017年
- ② 木下光生『貧困と自己責任の近世日本史』人文書院 2017年
- ③ 伊藤鄭爾『中世住居史——封建住居の成立』東京大学出版会 1958年
- ④ 安丸良夫『神々の明治維新——神仏分離と廃仏毀釈』岩波書店 1979年
- ⑤ 菊池 暁『柳田国男と民俗学の近代——奥能登のアエノコトの二十世紀』吉川弘文館 2001年

* * *

①は、貨幣・信用を通して見た中世社会論の最先端かつ最良の成果。理論

を根元で支える地味で確かな実証。その眩いばかりのコントラストこそ本書のもつ奥行にほかならない。

②は、施行される立場、しかも施行の忌避という二重の倒立を通して、現代日本の貧困をめぐる言説を照射する。「生」をめぐる高い問題意識が本書のエネルギーである。

③は、文献史料・絵画史料あるいは都市と農村のバランスのよさが目を引く。系図の復元を通して、生きられた場所としての住居を描く手法には学ぶ点が多い。奈良研究にとっても欠かせない。

④は、近代化の持つ抑圧的側面へ舵を切った本格的な著作。日本の精神史の転換点を、安丸マジックともいわれる独特の切り口、名文で世に問うている。「明治150年」の今、あらためて目を通したい。

⑤は、文化財の保存よりその活用が強調される今日、文化財をめぐる人々の営為（思惑）を振り返り、とりわけ研究者の言葉と振舞の持つ重みと責任を足元から見つめるためにも、長く読み継がれるべき本である。

原口志津子

(奈良大学文学部文化財学科教授／日本美術史)

- ① 小川剛生『兼好法師——徒然草に記されなかった真実』 中公新書 2017年
- ② 末木文美士『草木成仏の思想——安然と日本人の自然観』 サンガ文庫 2017年

③ 米倉迪夫『源頼朝像——沈黙の肖像画』 平凡社 1995年(新書2006年)

④ 黒田俊雄編『村と戦争——兵事係の証言』 桂書房 1990年

⑤ 大隅和雄・西口順子編『シリーズ女性と仏教(全4巻)』 平凡社 1989年

* * *

①③は、誠実な学問的手続きによって先入観が打ち砕かれてゆく爽快さと知的な喜びを与えてくれる書である。

②の筆者は、2011年に「災害天罰論」でおおいに批判された。本書についても全面的に理解賛同はできない。しかし、「日本には山川草木も皆成仏するという思想があり、自然と共存してきた」という耳あたりのよい日本人論について考えてみたい人には必読である。

④は、元兵事係・出分重信が決死の覚悟で焼却処分から救った徴兵関係文書を、日本中世史の泰斗・黒田俊雄が編纂し、出分に聞き取りを行ったものである。戦争は官僚組織と身分制度、個人情報管理システムに則って遂行されるものであることが痛感される。

⑤は、日本史の中で周辺領域とみられてきた女性と仏教に関する偏見を、多彩な視点から糺した名著である。本書執筆者の西口順子、勝浦令子、細川涼一らの他の著作も必読。

原田敬一

(佛教大学歴史学部教授／日本近現代史)

- ① 西川祐子『古都の占領——生活史

読書アンケート

- からみる京都 1945～1952』平凡社 2017年
- ② 一ノ瀬俊也『飛行機の戦争 1914—1945—総力戦体制への道』講談社現代新書 2017年
- ③ 日本史研究会編『日本の建国』青木文庫 1966年
- ④ 藤村道生『日清戦争——東アジア近代史の転換点』岩波新書 1973年
- ⑤ 石井寛治『日本の産業革命——日清・日露戦争から考える』朝日選書 1997年

* * *

①は、聞き取りにより「占領」を目に見えるように描いた画期的な研究書だが、一般書のように描くという著者の意図が十分行届いている。占領軍の動線と事故を地図に示してみると、見えない「占領」が見えてくる。

②は、「大鑑巨砲主義」は幻想で、軍事的啓蒙はもっと進んでいたと喝破し、それでも日本は敗戦となったことをふりかえらせる。

③は、「紀元節」の朦朧さ加減をとことんまで解明した共同の成果。

④は、日清戦争を学問の世界に再登場させた歴史的名著。

⑤は、経済史と戦争をドッキングさせた最初の通史。いつもながら明快でわかりやすい。

足田直己

(文教堂横須賀モアーズ店 次長/日本近現代史)

- ① 笠原十九司『日中戦争全史 (上・

下)』高文研 2017年

- ② 吉田 裕『日本軍兵士』中央公論新社 2017年
- ③ 戸谷由麻『東京裁判——第二次大戦後の法と正義の追求』みすず書房 2008年
- ④ 家永三郎『戦争責任』岩波書店 1985年 (2002年、岩波現代文庫に収録)
- ⑤ 日本国際政治学会編集『太平洋戦争への道 (全8巻)』朝日新聞出版 1987年～1988年

* * *

通史として非常に良く出来ているのは、①と⑤。日中戦争勃発80周年の年に刊行された①は、素晴らしい大作で、日中戦争の側面を端的に表現しています。その戦争下の兵士の実態に触れたものが②。アジア・太平洋戦争の実態として、餓死者が多かったことはあまりに知られていません。これについては先頃ちくま文庫として復刊した藤原彰氏の『飢死した英霊たち』(元版は青木書店)にも詳しく出ていますが、最終章で深く論じています。著者からの年賀状に「売れていますか?」とありましたが、当店でも100冊超の売り上げです。敗戦後、日本を裁いた東京裁判の全貌を描き切った③も素晴らしい著作です。他方「戦争責任」という問題に踏み込んだ④は敗戦国である日本、とりわけ国民全てにこの「戦争責任」は継承されると言います。家永氏は連合国側にもそれは当てはまると論じています。原爆や空襲で何百万という民間人が殺戮された現実がある

からです。⑤も重要な史料です。戦時中、朝日新聞社が戦争遂行を煽っていただけあって、軍部史料から見える十五年戦争がよく分かります。歴史から何を学ぶかは激動の社会を生き延びる糧になります。これからも「歴史」を伝えていける書店員でありたいと考える毎日です。

福田千鶴

(九州大学基幹教育院教授/日本近世史)

- ① 高野信治『武士神格化の研究』
吉川弘文館 2018年
- ② 三保忠夫『鷹狩と王朝文学』
吉川弘文館 2018年
- ③ 朝尾直弘『将軍権力の創出』
岩波書店 1994年
- ④ 塚本 学『生きることの近世史
—人命環境の歴史から』
平凡社 2001年
- ⑤ 榎森 進『アイヌ民族の歴史』
草風館 2007年

* * *

①は、北海道から沖縄までの4000以上の武士祭神を悉皆的に把握し、武士の神格化を通して武士の自他認識を論じたもの。②は、三保氏の『鷹書の研究』(和泉書院、2016年)に続く鷹狩研究の大成。いずれも、研究史に永く刻まれる大著である。

③は、朝尾氏の代表作であり、近世史研究者なら必ず目を通すべき不朽の名著。全集では、第3巻にある。

④は、「日本列島上の住民の歴史」を問いつけた塚本ワールド全開の名著。『生類をめぐる政治 元禄のフォーク

ロア』(平凡社、1983年)とあわせて読みたい。

⑤は、アイヌ民族通史の決定版で、擦文文化の時代から現代にいたるまでの歴史を639頁に及び叙述し、アイヌ民族が抱える現代的課題の問題点を鋭く掘り起こしている。その内容の豊かさだけでなく、歴史学が果たすべき役割に真摯に向き合った著作として、畏敬の念を抱かざるをえない。なお、この他にも数ある名著を紹介できないのが残念だが、以上を私の本棚からの紹介としたい。

藤川隆男

(大阪大学教授/オーストラリア史)

- ① ジョー・グルディ&デイヴィッド・アーミテイジ(平田雅博・細川道久訳)『これが歴史だ! / 21世紀の歴史学宣言』
刀水書房 2017年
- ② 立石博高『スペイン帝国と複合君主政』
昭和堂 2018年
- ③ フリッツ・ケルン(世良晃志郎訳)『中世の法と国制』
創文社 1968年
- ④ ヨハン・ホイジンガ(高橋英夫訳)『ホモ・ルーデンス』
中央公論社 1973年
- ⑤ フェルナン・ブローデル(浜名優美訳)『地中海・環境の役割』
藤原書店 2004年

* * *

大学の学部時代に読んで印象に残った本のうち③は、古き法は良き法という観念を明示し、それが民衆の抵抗の支柱になることを示唆しており、中世

史の魅力を感じると同時に現代の原理主義にも通じると思った。④の人間の本質に遊びがあるという主張は、マルクス主義的な歴史に強い懐疑心を抱いていた私にとっては、歴史研究のテーマを幅広く選択するきっかけになった。自分で読んだことがないという理由で、哲学の先生から講義中にこの本の説明を頼まれたことも記憶に残っている。大学の哲学の教授が知らないということに謙虚に向き合っていることがわかり、哲学好きになった。⑤を読んだときは、原語で読んだのだが、歴史研究の対象となりえるものの多様さ、歴史学の考え方の多くを学んだ。1日10頁しか進めなかったこともあり、よけいに印象に残っている。またウォーラーズテインへの導入の書でもあった。ただし翻訳は少し読みにくい。最近の本では、①は、歴史という学問の今後の方向を考えるのに良いと思う。②は近世スペイン史を教えるにあたって参考にさせてもらった。

藤田英昭

(徳川林政史研究所研究員／幕末維新史)

- ① 井上 勲『明治維新 I』 研文出版 2017年
- ② 久住真也『王政復古——天皇と將軍の明治維新』 講談社現代新書 2018年
- ③ 原口 清『戊辰戦争』 塙書房 1963年
- ④ 松浦 玲『新選組』 岩波新書 2003年
- ⑤ 家近良樹『西郷隆盛と幕末維新の

政局——体調不良問題から見た薩長同盟・征韓論政変』 ミネルヴァ書房 2011年

* * *

①は、安易な妥協を排して、自身の生き方、学問に対する姿勢を徹底的に貫いた大著。襟を正して拝読したい。

②は、画像資料も駆使して王政復古への流れを提示した幕末維新史研究の最前線。当該期の革新と連続を新視点で論じた。

③は、先行研究の批判的継承、史実の究明と理論的な裏付け等々、学問・研究の上で学ぶべき点は数知れない。打ち立てられた学説は、今でも色褪せない名著。

④は、近藤勇の書簡を徹底的に読み込み、新選組研究を新たなステージに押し上げた記念碑的な著作。

⑤は、著者自身の病気体験をもとに、新たな西郷隆盛像を描いた労作。学問・研究の視点が、自身の経験と密接に関わることを痛感させられる。

古川隆久

(日本大学教授／日本近現代史)

- ① 小澤 実編『近代日本の偽史伝説』 勉誠出版 2017年
- ② 山本義隆『近代日本一五〇年——科学技術総力戦体制の破綻』 (岩波新書) 岩波書店 2018年
- ③ 小川幸司『世界史との対話——70時間の歴史批評(上・中・下)』 地歴社 2011～2012年
- ④ 関 静雄『ロンドン海軍条約成立史』 ミネルヴァ書房 2007年

- ⑤ 笠松宏至『徳政令——中世の法と慣習』（岩波新書）岩波書店
1983年

* * *

①は、アカデミズムからは相手にされないけれども、人びとの心どころか国家さえ捉えてやまない妖しい歴史についての初の学術論文集。

②は、科学技術の視点からの日本近現代史。国家に依存した科学技術振興が学問と社会の乖離をもたらし、福島原発事故という破たんに行きついたと説く。示唆する所は深い。

③は、高校世界史の授業をもとにしたもの。人間性豊かで奥深くて面白い、こんな授業を受けて見たかった。3冊もあるが読み始めたらずめられない。

④は、1930年のロンドン海軍軍縮条約問題をめぐる日本政治外交史の本。未刊行史料を一つも使わずにこれだけ含蓄ある面白い本が書けるのだ。

⑤は、永仁の徳政令を軸に日本中世の法と社会の関係を解き明かす。歴史研究の魅力を満喫させる謎解き風の論の運びに引き込まれ、大学院入試の面接で将来の目標をきかれて、私は迷わず「こんな本を書けるようになりたいです」と答えたのである。

細川道久

(鹿児島大学教授／カナダ史・イギリス帝国史)

- ① 杉本淑彦『ナポレオン——最後の専制君主、最初の近代政治家』岩波新書 2018年
② 藤原辰史『トラクターの世界史——

人類の歴史を変えた「鉄の馬」たち』中公新書 2017年

- ③ 木畑洋一『支配の代償——英帝国の崩壊と「帝国意識」』東京大学出版会 1987年

- ④ 井野瀬久美恵『大英帝国という経験』講談社学術文庫 2017年

- ⑤ マクドナルド（ウィリアム・ルイス、村上直次郎編、富田虎男訳訂）『「日本回想記」——インディアンの見た幕末の日本（再訂版）』刀水書房 2012年

* * *

①は、種々の史料を使って、ナポレオンの生涯を追うとともに、様々なナポレオン伝説が創られてきたことを興味深く描く。史料分析と叙述のブレンドが絶妙。

②は、トラクターに着目したユニークな書。アメリカから、ソ連、ドイツ、中国、日本まで、技術、政治、社会、文化の歴史が交錯する。トラクターの如く（！）、ぐいぐい引っ張りこまれた。

③は、帝国意識に関する先駆的研究。フォークランド紛争に帝国意識の残滓を見出した著者は、19世紀末から現代まで帝国としてのイギリスの有り様を跡づける。現代的視点に立つ分析は、刊行から30年たっても色あせていない。

④は、イギリス帝国の歴史的諸相を平明に描く。文学、紅茶、ミュージックホールなど多彩なテーマに加え、近年のジェンダー視点も取り入れている。原本刊行は2007年。

- ⑤は、北米のマイノリティの眼を通

読書アンケート

して幕末日本を活写する。日本最初の英語教師がインディアンとヨーロッパ人の混血（メイティ）だったことを是非とも知ってほしい。

前川一郎

（創価大学教授／イギリス近現代史・植民地主義史）

- ① 松戸清裕ほか編『ロシア革命とソ連の世紀（全5巻）』岩波書店 2017年
- ② 中澤信彦・桑島秀樹編『パーク読本——〈保守主義の父〉再考のために』昭和堂 2017年
- ③ I・ウォーラーステイン（川北稔訳）『近代世界システム（I～IV）』名古屋大学出版会 2013年
- ④ E・H・カー（原彬久訳）『危機の二十年——理想と現実』岩波文庫 2011年
- ⑤ 木畑洋一『支配の代償——英帝国の崩壊と「帝国意識」』東京大学出版会 1987年

* * *

グローバル化の渦中にあり、かえってナショナルな力を目の当たりにする。①は、ロシア革命百周年に合わせて編まれた圧巻。国家はもとより近代や民族等、「革命」期ソ連が向き合った諸問題が、現代世界の課題に通じていると示唆する。②は、フランス革命期に活躍した〈保守主義の父〉エドモンド・パークの思想史。入門書の体でありながら、最前線の議論が凝縮された力作。「保守」再考が叫ばれる今日、堅実な実証とねばり強い思考

を重ねたこうした基礎研究こそが役に立つ。

③以下は、筆者が学生・院生時代に紐解き、これまで何度も読み返してきた三冊となった。③と④は、もはや説明を要することなき古典。中心と周辺、リアリズムとユートピアニズム等々、今日の人文社会科学で通用する基礎概念や言葉の多くは、ここから生まれた。⑤は、日本の「帝国史」研究を代表する名著。「帝国意識」は、いまなお払しょくされず、国際社会を特徴づけている。

牧原成征

（東京大学准教授／日本近世史）

- ① 高橋元貴『江戸町人地の空間史』東京大学出版会 2018年
- ② 鳥田英明『歴史と永遠』岩波書店 2018年
- ③ 古川貞雄『村の遊び日』平凡社 1986年（増補版 農山漁村文化協会 2003年）
- ④ 原直史『日本近世の地域と流通』山川出版社 1996年
- ⑤ 吉田伸之『日本の歴史17 成熟する江戸』講談社 2002年（講談社学術文庫 2009年）

* * *

①②は、文学部系の歴史研究とは少し異なるが、それぞれ建築史・政治思想史の気鋭若手研究者による秀作。

①は、江戸町人地を対象に、都市空間の開発や形成、発展や衰亡という従来の見方ではなく、空間の維持・存続という観点から捉え直す試み。

②は、徂徠学派以降の学者や知識人が、歴史の上にながく語り継がれたいと願って繰り広げた思索や営みをリアルに描き、研究者には身につまされる。

③は、「遊び日」への着目から江戸時代の村の姿をみごとに浮かび上がらせる。著者は、在野の歴史学において長い伝統を有する長野県で、長年、研究や県史編纂に携わった。

④は、房総と江戸における干鰯流通を素材に、運輸の担い手、売買の場や構造を精緻に明らかにする。近世流通史研究の到達点の一つ。

⑤は、複雑に成熟した江戸の都市社会を、社会的権力、身分的周縁、市場社会という三つの対象＝方法に即して精緻に描き、そこから日本近世の全体史に迫る。

松木武彦

(国立歴史民俗博物館教授／考古学)

- ① 吉田 裕『日本軍兵士——アジア・太平洋戦争の現実』中央公論新社 2017年
- ② ジャレド・ダイヤモンドほか(小坂絵里訳)『歴史は実験できるのか——自然実験が解き明かす人類史』慶應義塾大学出版会 2018年
- ③ 阿部謹也『ハーメルンの笛吹き男』平凡社 1974年
- ④ 近藤義郎『前方後円墳の時代』岩波書店 1983年
- ⑤ スティーブン・ピンカー(幾島幸子・塩原通緒訳)『暴力の人類史(上・下)』青土社 2015年

* * *

歴史学・考古学の眼は、大きな幅のズームレンズでなければならない。史実の詳細を「接写」した①と、歴史そのものを「望遠」して実験対象にまでした②は、ズームレンズの両極をなす最新作。とりわけ、餓死・海没・自殺など、戦場での死の本当の姿をさまざまな文献記録から浮き彫りにした①は、10万部以上も売れているという。過去の戦争を礼賛し、未来の戦争を扇動するかのような昨今の状況への危機感の表れか。②は、歴史は過去のものではなく、いままさに私たちが生み出している「現象」であることに気づかせる。

歴史学と考古学のレンズには、幅広いズーム機能だけではなく、さまざまな種類のフィルターも必要だ。

③は、1980年代に研究者として育った私たちの世代に人気を博した本で、民衆史というフィルターで新たに見えてくる中世ヨーロッパの姿に心を躍らせた。

④は、文献資料にいっさい頼らず、「考古資料オンリー」というフィルターで弥生・古墳時代の歴史を詳述した空前絶後の本。⑤は、非・歴史学(認知心理学)のフィルターでつづられた希望の歴史書である。

三木哲夫

(紀伊國屋書店販売促進本部課長代理／日本近現代史)

- ① 南川高志編『378年 失われた古代帝国の秩序』山川出版社 2018年

- ② 寺尾紗穂『あのころのパラオをさがして——日本統治下の南洋を生きた人々』 集英社 2017年
- ③ 牧原憲夫『客分と国民のあいだ——近代民衆の政治意識』 吉川弘館 1998年
- ④ 安丸良夫『近代天皇像の形成』 岩波書店 1992年（2007年、岩波現代文庫に収録）
- ⑤ 加藤陽子『昭和天皇と戦争の世紀』 講談社 2011年（2018年、講談社学術文庫に収録）

* * *

①は、世界史の転換点を全地球的に記述しようとする野心的なシリーズの新刊で4世紀後半におけるローマ帝国と中国を同時代史として描く。4月刊の『中央ユーラシア史研究入門』といい、山川出版社の世界史的視座は目を引く。

②は、比較文学論の修士号を持つシンガーソングライターによる、戦時中パラオの聞き書き集。論文でなく散文作品としたことによりむしろ核心に近づいている。人々が口ずさむ歌への感性の鋭さは著者ならでは。

③は、評者に歴史学の魅力を教えてくれた作品。国民国家論に勢いのあった時期の最良の成果の一つと思う。冒頭に挑戦的な問いを立て、史料によって論証していく構成の鮮やかさが印象的。

④と⑤は、思想史と政治史、「生活者としての民衆」と「武田泰淳のいう政治的人間としての昭和天皇」など、全く対照的な切り口から、天皇という

日本近代史の最重要課題に正面から取り組んだ労作。いずれも膨大な史料を読み込んだ碩学の切れ味は鋭い。

宮城大蔵

（上智大学教授／国際政治史・日本外交）

- ① 三谷太一郎『日本の近代とは何であったか』 岩波新書 2017年
- ② 河野康子、平良好利編『対話 沖縄の戦後』 吉田書店 2017年
- ③ ナヤン・チャンダ『ブラザー・エネミー』 めこん 1999年
- ④ スティーブン・ランシマン『コンスタンティノーブル陥落す』 みすず書房 1969年（1998年新装版）
- ⑤ ニム・ウェールズ『アリランの歌』 岩波文庫 1987年

* * *

①は、政党政治、資本主義など四つの切り口から現代に通じる日本近代の「問題史」を考察する。重厚に歴史を語りながら未来への息吹も感じさせる。

②は、日本本土では馴染みの薄い沖縄戦後史の奥行きを理解する上で、当事者への聞き取りや対談が有効であることが説得的に示されている。

③は、サイゴン陥落後の複雑なインドシナ現代史を、主要な指導者の思惑から多国間にまたがる歴史的背景まで、力量のあるジャーナリストが総体として描き出す。

④は、ローマ帝位を連綿と受け継いできたビザンツ帝国の滅亡（1453年）を陰影に富んだ文章で綴り、深い余韻を残す。一都市の陥落は、東西文明間

における歴史の決定的瞬間でもあった。

⑤は、1937年、延安で中国革命の取材をしていた著者が知り合った朝鮮人革命家の半生の記録。革命運動の熱情や苦闘が縦横に語られ、後日談として明かされる歴史の残酷さを含め、忘れたくない印象を残す。

宮脇淳子

(東洋文庫研究員／アジア史)

- ① ジョージ・アキタ／ブランドン・パーマー『「日本の朝鮮統治」を検証する』草思社 2017年
- ② 倉山 満『嘘だらけの日独近現代史』扶桑社 2018年
- ③ 岡田英弘『歴史とはなにか』文藝春秋 2001年
- ④ 市古宙三『世界の歴史 20 中国の近代』河出書房新社 1969年
- ⑤ 佐口 透『ロシアとアジア草原』吉川弘文館 1966年

* * *

①は、ハワイ大学の日系米国人と米国人学者の共著の文庫化で、原著と日本語訳は2013年に刊行された。日韓の数多くの史料を調べて数字を挙げ、政治と一線を画し客観的な叙述をおこなう好著である。

②は、憲政史家である著者が2012年に出した『嘘だらけの日米近現代史』以来、中・韓・露・英・仏と続いた「嘘だらけシリーズ」七部作の最後で、国ごとに著者が変わる概説書と違い、同じ筆調で日本との関係を語るの、世界史の見直しに役立つ。

③は、日本人の歴史の見方を変えるのに貢献した著者の代表作、歴史は文化の一種で「歴史のない文明」もあること、地中海文明とシナ文明だけが自前の歴史文化を生んだこと、等々、目から鱗の歴史哲学満載の書。

④は、類書が多くある中国近代史のなかで最も信頼がおける概説書であるが、残念ながら日本の敗戦後はない。

⑤は、日本の教科書では語られない中央ユーラシア草原の歴史を、漢籍や欧米の文献を網羅して叙述する第一級の学術書である。

村井康彦

(国際日本文化研究センター名誉教授／日本古代中世史・文化史)

- ① 浜崎加奈子『香道の美学——その成立と王権・連歌』思文閣出版 2017年
- ② 伊藤之雄『「大京都」の誕生——都市改造と公共性の時代 1895～1931年』ミネルヴァ書房 2018年
- ③ 三坂圭治『周防国府の研究』積文館 1933年
- ④ 清水三男『日本中世の村落』日本評論社 1942年
- ⑤ 大岡 信『うたげと孤心——大和歌篇』集英社 1978年

* * *

①は、代表的な日本の伝統文化とされる茶・花・香だが、香道についての纏まった歴史的研究は、あるようでない。香道の成立を王権や連歌との関わりから論究した新進気鋭の書である。

②は、東京遷都により没落の危機に

直面した京都を近代都市として甦らせたのは、いわゆる三大事業など、官民による都市近代化の諸政策だった。都市政策を包括的に論じた重厚な書である。

③は、国府の所在地を四角形で表示するのは、周防国府の八町四方が大内氏により守護不入とされた事実に基づく。戦後に進んだ国府研究の先駆となった業績である。

④は、戦後進展した荘園研究は、公(国衙)領とあわせて考えるべきだとする「荘園公領制」の視点を持つに至るが、『上代の土地関係』(伊藤書店/1943年)ともども所収論考は国衙領研究の豊かな土壌となった。

⑤は、連歌・俳諧や茶の湯など日本文芸の特質として寄合性が強調されるなかで、うたげにあっても孤心を持ち個性を失わない者だけが芸術家たりうるとする指摘は、文化史研究者にとって頂門の一針だった。

村 和明

(東京大学大学院人文社会系研究科准教授/
日本近世史)

- ① マーガレット・メール(千葉功・松沢裕作〔訳者代表〕)『歴史と国家——19世紀日本のナショナル・アイデンティティと学問』東京大学出版会 2017年
- ② 山口和夫『近世日本政治史と朝廷』吉川弘文館 2017年
- ③ 山口啓二『鎖国と開国』岩波書店 1993年(2006年、岩波現代文庫に収録)

④ 藤田 覚『幕藩制国家の政治史的研究——天保期の秩序・軍事・外交』校倉書房 1987年

⑤ 網野善彦『古文書返却の旅——戦後史学史の一齣』中公新書 1999年

* * *

①は、明治の修史事業史。近年隆盛の史学史の基本文献。日本の読者にとっては、日本で継承されてきた歴史学を、その歴史的な規定性から批判的にとらえ直し、発展の方向を模索してゆくために必読。

②は、近世天皇・朝廷研究の現時点における到達点。研究史の網羅、多様な史料の開拓と周到な分析、朝廷を過度に特殊視せず近世政治史の普遍的な方法論で分析する姿勢が、簡潔な文章に凝縮される。

③は、個別分野史が精緻化・細分化していくなか、多様な論点を包括した日本近世史全体の把握として不朽の作品。講演録形式で読みやすいが奥行きは深遠。定期的に読み返すと自分の変化もわかる。

④は、政治史というものを具現化したような一冊。徹底的に博搜・精選された史料を読みすすめるうち、様々な組織と力、論理と利害がきしみ合う世界がありありと理解されてくる。

⑤は、歴史学の社会からの遊離が懸念されるいまこそ読み継ぐべき一冊。歴史像の鮮やかな展開に、著者の人間性と生き方の選択、日本における史料のあり方をめぐる諸問題も一体となり、読むものを肅然とさせる。

村木二郎

(国立歴史民俗博物館准教授／日本中世考古学)

- ① 荒木和憲『対馬宗氏の中世史』吉川弘文館 2017年
- ② 佐藤 信編『水中遺跡の歴史学』山川出版社 2018年
- ③ 小野正敏『戦国城下町の考古学』(講談社選書メチエ) 講談社 1997年
- ④ 村井章介『中世倭人伝』(岩波新書) 岩波書店 1993年
- ⑤ モンテリウス著・濱田耕作訳『考古学研究法』雄山閣出版 1933年

* * *

①対馬宗氏に止まらない中世史を俯瞰する気鋭の著書。

②水中遺跡研究の一つの到達点。

③一乗谷朝倉氏遺跡は中世考古学の聖地であり、常に新しい情報を発信し続けている。しかし次々と更新される発見にもかかわらず、本書の輝きは褪せることがない。著者はこれからの新発見をも見抜いているかのように、読むたびに空恐ろしさを感じる名著である。

④歴史家のメッセージが社会に影響を及ぼす、それを実現した数少ない書籍であろう。分野外の人びとにも、長く読み継がれてほしい。

⑤考古学を志す人は必ず目にする教科書。文体も活字も古いが、それがまた味わいになっており、時間をかけて読み返したい一書である。

本村凌二

(東京大学名誉教授／古代ローマ社会史)

- ① スーザン・P・マターン (澤井直訳)『ガレノス 西洋医学を支配したローマ帝国の医師』白水社 2017年
- ② ジョナサン・ハリス (井上浩一訳)『ビザンツ帝国 生存戦略の一千年』白水社 2018年
- ③ Th・モムゼン (長谷川博隆訳)『ローマの歴史 (I-IV)』名古屋大学出版会 2005～07年
- ④ R・サイム (逸見喜一郎ほか訳)『ローマ革命 (上・下)』岩波書店 2013年
- ⑤ ユヴェル・ノア・ハラリ (柴田裕之訳)『サピエンス全史 (上・下)』河出書房新社 2016年

* * *

① ヒポクラテイス集成はあっても通説などなかった古代の医療界。診断と治療の能力で圧倒しなければならなかった。ガレノスは解剖技術に卓越し、脈拍、血色、尿、便、汗などの微妙な変化から適確な診断を下す。「最良の医師」たらんとした医学探究の巨星の評伝は読みごたえがある。

② キリスト教徒の十字軍勢力も内なる敵としてビザンツ帝国を脅かしたが、西方のラテン人には他者を同化し、その技術を利用する能力に欠けていた。これに対して、「ビザンツ帝国の最大の遺産は、もっとも厳しい逆境にあっても他者をなじませ統合する能力にこそ、社会の強さがあるという教訓である」と著者は指摘する。問題の核心は

読書アンケート

ここにあるのだ。領土が縮小し国力が弱体化しても、ビザンツ帝国は「なぜ存続できたのか」と問い掛けるべきなのだ。まぎれもなくビザンツ史研究の泰斗である訳者をして「こんな本を書きたかった」という述懐がことさら印象に残る。

③ 名著の白眉といえるもの。なにしろ、『戦争と平和』の文豪トルストイや社会進化論の哲学者スペンサーをおさえて、1902年のノーベル文学賞を授与されたのだ。その榮譽に輝いた唯一の歴史家でもある。

④ 20世紀を代表するローマ史研究の名著。古来の伝統的な貴族が没落し、第一人者アウグストゥスが登場する。その権力を支える人々が台頭する転換期は「革命」だった。親族関係・婚姻関係・利害関係の解明には芳香が立つ。

⑤ サピエンスはいかにして人類種として唯一生き延びて来られたのだろうか。この問い掛けが本書の底流をなす。その起点となる7万年前の出来事がある。そのころからサピエンスはアフリカ大陸の外へと拡がり、それとともに認知能力に著しい飛躍が見られたという。危険を知らせる情報伝達ならサルでもできるが、サピエンスは柔軟な言語をもって集団内の噂話をし、親密になる。誰が誰を憎んでいるか、誰と誰が寝ているか、誰が正直で誰がずるいか、それらの話題がはるかに重要だった。これは認知革命であり、たまたま遺伝子の突然変異が起こったにすぎないという。伝説や神話が紡がれ、

神々が崇められる。サピエンスはライオンを恐れるばかりか「部族の守護霊」に祭り上げた。このような虚構についてまことしやかに語る能力は地球の歴史に異彩を放つ。今や月面に足跡を刻むばかりか、ゲノムの解析を通じて新しい生物をも創出する勢いにある。だが、生態系の破壊は進み、地球全体の幸福はなにも考慮されていない。このままではサピエンスは地球を盗んで荒廃させる最も危険な生物でしかない。人類は何を望んでいるのか、その自分の真の姿を見抜けるかどうか。そう警告する著者は若いイスラエル人歴史学者であるが、本書は熟読に値する重さをもっている。

森 公章

(東洋大学教授／日本古代史)

- ① 大橋泰夫『古代国府の成立と国郡制』吉川弘文館 2018年
- ② 辻 浩和『中世の〈遊女〉』京都大学学術出版会 2017年
- ③ 直木孝次郎『日本古代国家の構造』青木書店 1958年
- ④ 田中俊明『大加耶連盟の興亡と「任那」』吉川弘文館 1992年
- ⑤ 東野治之『長屋王家木簡の研究』塙書房 1996年

* * *

①は、考古学的な検討に基づき、国府遺跡の成立を従来よりも早く考える知見を示し、律令制地方支配の形成と展開を考究する上で、新たな視点を示したものとして興味深い。

②は、奈良・平安時代の考察も含み、

当該テーマの探求だけでなく、社会史的現象を研究する手法としても参考になる。近年、こうした分野を卒論のテーマに選択する学生も多いが、その取り組み方法を学ぶ上で役立つ。

③は、律令制成立以前の国家構造を解明するもので、分布法・反映法等の研究手法の呈示と実践を示し、人制に関する先駆的な考察などもあり、古代史研究の面白さを教えてくれた本である。

④は、「任那」と「加羅」の用法を解明し、「任那日本府」史観を払拭して、『日本書紀』継体・欽明紀を正確に理解する上で、蒙を啓いてくれたもの。

⑤は、長屋王家木簡の読解、国語学的検討を示すとともに、文化・制度移入に関しても参考になる論点が示されている。

森田安一

(日本女子大学名誉教授／スイス史・宗教改革史)

- ① 深沢克己『マルセイユの都市空間——幻想と実在のあいだで』 刀水書房 2017年
- ② 大川四郎・岡村民夫編『国際都市ジュネーヴの歴史——宗教・思想・政治・経済』 昭和堂 2018年
- ③ 堀米庸三『西洋中世世界の崩壊』 岩波書店 1958年
- ④ 宮下啓三『中立をまもる スイスの栄光と苦難』 講談社 1968年
- ⑤ 倉塚平『異端と殉教』 筑摩書房 1972年

* * *

内陸のスイス都市を研究する筆者にとって、地中海の港湾都市を扱う①は、比較の意味で興味深いものがあった。国際都市ジュネーヴを扱った②は、スイス史だけではなく、カルヴァンやルソーの思想研究にも役立つ総合的な内容をもつ研究書である。

③以下の書物は、筆者の研究分野に転換点を示唆してくれたものとして紹介したい。③は、大学の教養学部時代に専門を選択するにあたって影響を受けた書物である。中世ヨーロッパ世界の構造をヴィヴィッドに示してくれたが、その世界がどのように崩れるのかということで、宗教改革時代の研究に向かわせてくれた。④は、文学者のスイス現代史とも云えるものだが、スイス史研究全般に興味をもたらせてくれた最初の書物である。⑤は、政治思想家がラディカルな宗教改革運動を分析した書物で、歴史をどのような切り口で考察すべきかのヒントを与えてくれた書物である。

柳原敏昭

(東北大学大学院文学研究科教授／日本中世史)

- ① 五味克夫『南九州御家人の系譜と所領支配』 戎光祥出版 2017年
- ② 瀬畑源『公文書問題——日本の「闇」の核心』 集英社 2018年
- ③ 小林清治・大石直正他『中世奥羽の世界』 東京大学出版会 1978年
- ④ 家永三郎『太平洋戦争』 岩波書店 1968年 (2002年、岩波現代文庫に収録)

- ⑤ 近藤典彦『石川啄木と明治の日本』吉川弘文館 1994年

* * *

①は、著者長年の成果を3冊に凝縮した著作集の一。地域の史料を掘り起こし、堅実な実証研究を進めることがいかに大切かをあらためて教えられた。②は、歴史学とも密接する今日の大問題を考える上での導きの書。「公文書管理法」第1条の重みを再確認したい。

③は、この本を超えようと何度か出版企画を試みたが、未だ克服し得ていない高峰のような存在。コンパクトであるにもかかわらず、流れを失わず、数々の鋭い論点提示を行っているのは見事というほかない。

④は、大学2年生の夏休みに読んだ。歴史の見方が変わると、現実世界の見え方が一変することを経験した。余談めくが、著者の蔵書は中国の南開大学に寄贈されている。それを見学できたときの感激も忘れ難い。

⑤は、文学研究に属する本かもしれない。しかし、手法は歴史学的である。詩集『呼子と口笛』口絵の分析には戦慄すら覚えた。これまで読んだ書物の中で最も知的刺激を受けた一冊といっても過言ではない。

柳原伸洋

(東京女子大学准教授／ドイツ近現代史)

- ① 吉田 裕『日本軍兵士——アジア・太平洋戦争の現実』中公新書 2017年
② 高橋秀寿『ホロコーストと戦後ド

イツ——表象・物語・主体』岩波書店 2017年

- ③ 石田勇治『ヒトラーとナチ・ドイツ』講談社現代新書 2015年
④ イェルク・フリードリヒ(香月恵里訳)『ドイツを焼いた戦略爆撃——1940-1945』みすず書房 2011年
⑤ デートレフ・ポイカート(木村靖二ほか訳)『ナチス・ドイツ——ある近代の社会史』(新訂版) 三友社 2005年

* * *

①は、膨大な史料から兵士の「死」に迫った書籍。「悲惨だった」はある種の思考停止をもたらすが、そこから一歩、歴史的な内実へと思考を進ませてくれる。なお、ドイツ史ではナイツェルらの『兵士というもの』(小野寺拓也訳、みすず書房、2018年)もあり、併せて読みたい。

ドイツの「過去の克服」は、日本が模範とすべきとの論者も多い。②は、倫理的にはなく、あくまで歴史学として「なぜ？」を突きつけている。今後の議論を俟ちたい。

③は、最新のナチ・ドイツ研究の成果を反映させ、かつコンパクトにまとめられた書。憲法問題やヘイトスピーチで揺れる日本社会でこそ、読まれるべき一冊だろう。

④は、ドイツの被った空襲被害を写真した書。ドイツでベストセラーとなり、2003年に「ドイツ人は被害の国民か？」という論争を巻き起こした。また、今日も人を殺し続ける「空爆」を考えるために。

⑤は、天逝の歴史家による渾身の研究成果。ここ30年ほどの日本におけるドイツ現代史研究の成果の多くは、本書のエッセンスを批判し発展させたものと言っても過言ではあるまい。繰り返し読みたい。

山川 均

(大和郡山市教育委員会／日本考古学)

- ① 藤田達生『城郭と由緒の戦争論』校倉書房 2017年
- ② 奈倉哲三・保谷徹・箱石大編『戊辰戦争の新視点(上・下)』吉川弘文館 2018年
- ③ 永島福太郎『奈良』吉川弘文館 1963年
- ④ 山岸常人『塔と仏堂の旅——寺院建築から歴史を読む』朝日選書 2005年
- ⑤ 内田啓一『文観房弘真と美術』法藏館 2006年

* * *

①は、書籍自体の主題とはやや異なるが、文献史を専門とする筆者が、丹波八上城など、歴史的な重要遺跡の保存問題に取り組んだ経緯や経過がたいへん興味深い。

②は、専らその経過や関わった人物に偏重する傾向のあった「戊辰戦争」というテーマを、世界的視点や民衆史的視点から読み解こうとする視点が新鮮。

③は、古代から近現代に至る奈良の歴史が叙述された書である。内容はやや専門的だが、発刊後半世紀以上が経過した現在も、本書を超える奈良の通

史はない。

④は、木造建築という視点から「中世」をダイナミックに捉えている。律宗系工匠の瀬戸内地域における活動を、非常に具体的に解明した点が特筆される。

⑤は、どちらかといえばネガティブなイメージで語られることが多かった文観という律僧の実像を、多数の美術作品を通じて明らかにした労作である。

山崎善弘

(東京未来大学専任講師／日本近世史)

- ① 谷山正道『民衆運動からみる幕末維新』清文堂出版 2017年
- ② 荻部 直『「維新革命」への道——「文明」を求めた十九世紀日本』新潮社 2017年
- ③ 久留島 浩『近世幕領の行政と組合村』東京大学出版会 2002年
- ④ 藪田 貫『国訴と百姓一揆の研究』校倉書房 1992年
- ⑤ 深谷克己『百姓成立』塙書房 1993年

* * *

これまでに出会った歴史書の中から5冊を選ぶのは難しいことだが、自分の専門分野に引き付けて、5冊を名著としてお薦めしたい。

①は、民衆運動を主な分析対象とし、近世から近代への移行のあり方を探ろうとする意欲作である。近年、こうした研究はほとんど見られなくなったが、地域民衆の視座からの動的な分析を欠いては、近代への移行のあり方の実際を見誤ることになるだろう。こ

読書アンケート

の点に正面から取り組む本書は、名著と呼ぶにふさわしい。

②では、「文明」をキーワードとして、徳川時代後期から日本の近代化が始まっていたことを明らかにする。通説を見事に批判していることはもちろん、徳川時代後期と明治時代をつなぐ通史としても薦めたい。

③④は、1980年代における近世地域社会史研究の代表的成果である。両書は近世後期の地域社会における自治力に関心を向けたが、その主体たる中間層は支配機構としてもあり、後学の私には、その点をいかに評価して、地域社会をトータルに把握していくのが課題であった。そう考えていた時に出会ったのが⑤である。中間層は様々な形で「百姓成立」（百姓経営維持）の保証に関わっており、民政の深化を地域社会史研究の形で解明することができた。地域社会をトータルに把握することは、なお私にとって課題であり、学界においても大きな課題であろう。③④⑤が導き手となることは疑いない。

横内裕人

(京都府立大学教授／日本中世史)

- ① 芳澤 元『日本中世社会と禅林文芸』吉川弘文館 2017年
- ② 木下光生『貧困と自己責任の近世日本史』人文書院 2017年
- ③ 石母田 正『中世的世界の形成』岩波文庫 1985年
- ④ 高木 豊『鎌倉仏教史研究』岩波書店 1982年

- ⑤ 中井信彦『歴史学的方法の基準』塙書房 1973年

* * *

①は、文芸から禅宗と室町公武社会との相互補完関係をあぶり出す。ピークを迎えようとしている室町宗教史研究の熟度の高さを知ることができる。

②は、近世社会の貧困問題に向き合い、近世史の通説に疑問を投げかける。理論と実証のせめぎ合いに唸られ、現代から過去に向き合う姿勢に身を正した。

③は、中世とは何かを考える際に読み返す書物のうちの一冊。「その時その場所で何が起こっていたか。そしてその意味は？」同時に研究概念が更新される意義を味わえる。

④は、仏教史における時間論、空間論、王権論、正統性論を正面から論じる。中世宗教の枠組みと通史を提供した顕密体制論の影に隠れた視があるが、本書が解明をめざした諸視座なしに現在の日本中世宗教史はなりたたない。

⑤は、文化史の自律性を説き、また外的要因・偶然性が歴史形成に果たす作用をどうとらえるべきか、その理論を展開する希有な一書。

若井敏明

(関西大学・佛教学・神戸市外国語大学非常勤講師／日本古代史)

- ① 東野治之『史科学遍歴』雄山閣 2017年
- ② 井上章一編『学問をしぼるもの』思文閣出版 2017年

- ③ 村田治郎『法隆寺の研究史』 中央公論美術出版 1987年
- ④ 羽仁五郎『ミケルアンジェロ』 岩波新書 1939年
- ⑤ 伊藤 整『日本文壇史 (1～18)』 講談社文芸文庫 1994～97年

* * *

①は、史料考証こそ歴史学の王道であることをあらためて感じさせてくれる一冊。書後に「楽しみながら」という一句があるが、いつかその境地に達したい。

②は、人文学にからむ様々なしがらみについて論じた異色の学問史。学界に投げた一石は今後波紋を広げていくだろう。

③は、法隆寺を対象としつつ飛鳥・白鳳の文献・美術・考古の研究がいかに進展したかを見通せる作品。1949年初版。紹介したのは著者の補筆と新稿で再構成した著作集第2巻。

④は、フィレンツェ自由都市共和制の運命をミケルアンジェロの生涯と重ねて描いた名著。あまりの感情移入には異論もあろうが、歴史叙述が人の心を動かすことを教えてくれる一冊。冒頭の有名なセリフより私的には、フィレンツェがメディチ家と戦おうとする時の「望なき戦、というか？ しかし、何が人生の望であるか」という文章が好き。

⑤は、文壇にとどまらず、明治文化を担う人々の動きを、随所に伏線を張り巡らして生き生きと描いた名著。言い回しを拙著でまねたが遠く及ばなかった。

渡辺美季

(東京大学准教授／琉球史)

- ① 池内 敏『叢書東アジアの近現代 3 日本人の朝鮮観はいかにして形成されたか』 講談社 2017年
- ② ティネッロ・マルコ『世界史からみた「琉球処分」』 榕樹書林 2017年
- ③ 岸本美緒ほか編『岩波講座 世界歴史 13 東アジア・東南アジア伝統社会の形成』 岩波書店 1998年
- ④ 高良倉吉『琉球の時代——大いなる歴史像を求めて』 筑摩書房 1980年 (2012年、ちくま学芸文庫に収録)
- ⑤ 田代和生『書き替えられた国書——徳川・朝鮮外交の舞台裏』 中公新書 1983年

* * *

①は、江戸時代を中心に日本人の朝鮮観の変遷を叙述し、「事実」と「認識」の乖離が拡大していく様相を描く。今の時代にまさに読み、読まれるべき書物であろう。

②は、「幕末に琉球が欧米と締結した条約がなぜ明治政府による琉球併合の支障とならなかったのか」という問いを主軸に琉球の国際的位置の変動を読み解く。今まで盲点となっていた問いの重要性に加え、史料の精緻な分析に納得するところが多かった。

③は、旧来の一国史的な時代区分に対し「アジア」サイズの時代区分を提起して時代区分論に一石を投じた書物。

④は、日本史の一環として理解される傾向にあった琉球史を独自の内政・

読書アンケート

外交を展開した一国史として描き出し、
新たな王国像を提示した。

⑤は、①で言う「事実」がいかに一筋縄ではいかないディテールの上に展開していたのかを鮮やかに描く関係史研究の白眉である。

歴史系学会・シンポジウム開催情報

第28回 神保町ブックフェスティバル

チョット汚れておりますが…「本」の得々市バーゲンセール

会期＝2018年10月27日～28日 会場＝神保町すずらん通り*

◆問合せ(神保町ブックフェスティバル実行委員会) 電話 03-3291-5185 ※事前申込等不要

古代出雲文化シンポジウム 玉が語る古代出雲の輝き

会期＝2018年11月4日 会場＝有楽町朝日ホール

◆HP＝詳細あり

◆問合せ(同シンポジウム参加応募事務局) 電話 03-5790-6439 ◆参加方法 ハガキまたはインターネットにて申込

東方学会 平成30年度秋季学術大会

会期＝2018年11月10日 会場＝芝蘭会館別館(京都市左京区吉田牛ノ宮町)

◆問合せ(東方学会事務局) iec@tohogakkai.com ◆参加方法 メール・FAXで10月31日までに申込み ◆HP＝詳細あり

史学会 第116回大会 公開シンポジウム「奴隷と隷属の世界史」

会期＝2018年11月24日～25日 会場＝東京大学 本郷キャンパス*

◆問合せ(史学会事務局) shigaku@l.u-tokyo.ac.jp ◆HP＝詳細あり ※事前申込等不要

歴史科学協議会 第52回大会 【大会全体テーマ】歴史における危機と復興の諸相Ⅲ

会期＝2018年12月1日～2日 会場＝同志社大学 今出川キャンパス

◆問合せ(歴史科学協議会事務局) rekihyo@mx10.ttcn.ne.jp ※事前申込等不要 ◆HP＝詳細あり

第93回 経済史研究会

会期＝2018年12月8日 会場＝大阪経済大学

◆問合せ(日本経済史研究所事務局) nikkeisi@osaka-ue.ac.jp ◆参加方法 メールにて申込み ◆HP＝詳細あり

*印の会場では、歴史書懇話会による出張書籍販売がございます。

歴史書懇話会とは

〒113-0033 東京都文京区本郷 7-2-8 吉川弘文館内

1968年6月に歴史書を刊行する有志出版社7社で結成され、現在9社が加盟しています。結成以来50年、「すぐれた歴史書の普及とその販売を積極的に推進する。本会はその目的達成のため、会員相互の協力によって必要な研究ならびに事業を行う。」(会規約)の精神に基づき活動しています。

〈歴史書懇話会〉の主な事業

◆「歴史書通信」(隔月刊)最新の歴史書情報を提供しています!

会員各社の新刊・重版情報、誌上フェア、書店情報を掲載する出版情報誌。歴史関連のエッセイなども掲載し、歴史知識の普及をはかっています。ご購入を希望される方は最寄の書店を通して、事務局までお申込み下さい。

◆「歴史書ベストフェア」小規模書店にも本格派の歴史書を!

全国約90書店で会員社の歴史書40冊余を1年間展示販売しています。選択セットを加え、最大規模は120冊のセットとなります。出品リスト及び販売店一覧は「歴史書通信」5月号に掲載します。

◆「歴史リバイバル」復刊書フェアとしてご好評いただいています。

統一復刊・重版事業「歴史リバイバル」を実施しています。

一社では困難な専門書の復刊・重版を共同で行う活動です。読者から要望の多い名著や基本図書を復刊し、毎回100店近い書店・大学生協で店頭フェアを展開しています。

◆「ホームページ」&「メール通信」による情報発信

当会のホームページでは、新聞書評情報、歴史書の検索、書店フェアや各社の新刊案内、歴史書懇話会からメール通信を配信するメールアドレス登録の受付、「歴史書通信」PDF版などを掲載しています。

メール配信のお申込みは <http://www.hozokan.co.jp/rekikon/> からお願いします。

歴史書懇話会 会員社

明石書店・東京堂出版・刀水書房・同成社・搞書房
法蔵館・ミネルヴァ書房・山川出版社・吉川弘文館

◆ 238号でお知らせしましたように、歴史書懇話会は今年2018年6月に創立50周年を迎えることが出来ました。歴史書を刊行する有志出版社7社（御茶の水書房・学生社・至文堂・東京大学出版会・塙書房・山川出版社・吉川弘文館）で1968年6月に結成しました。当時は東大全共闘・日大全共闘など、全国で大学闘争が盛んだった頃でした。そして、現在9社が加盟しています。私たちは結成以来、「すぐれた歴史書の普及とその販売を積極的に推進する。本会はその目的達成のため、会員相互の協力によって必要な研究ならびに事業を行う」（会規約）の精神に基づき活動を続けています。本が売れない時代と言われてはいますが、必ずしも面白い本がないためとは言えなさそうです。小さな版元の少数の歴史書では、皆様を知って頂く事がとても難しいのです。私たちは、これからも魅力溢れる歴史書を作り続けたいのです。書店の皆様と協力しながら、読者の皆様を知って頂く努力を続けます！

◆ この240号では特別企画「特集／歴史書懇話会創立50周年記念【読書アンケート】」をご用意いたしました。ご協力頂いた先生方、書店の皆様、お蔭様でこんなに魅力あふれる企画が完成しました。本当にありがとうございました。ここに上げられた歴史の名著、皆様は何冊くらいお読みでしょうか？新しい歴史書に触れて頂ければ、きっと人生さらに豊かになる事でしょう！

◆ 50周年を記念して、多くの書店様との記念フェア等、私たちはこれから様々な企画を致します。皆様のご希望のフェアがございましたらば、是非お知らせ下さいませ。

◆ 10年以上、月代わりで「歴史書懇話会・今月のオススメ」の連続ミニフェアを次の6書店で開催しています（かつこ内はフェア開始の日付）。◇天童市TENDO八文字屋（2006年7月～）／◇新潟紀伊國屋書店新潟店（2007年8月～）◇松江市今井書店グループセンター店（2008年6月～）／◇大阪市喜久屋書店阿倍野店（2013年11月～）／◇出雲市今井書店出雲店（2014年7月～）／◇名古屋市ジュンク堂書店名古屋ロフト店（2015年6月～）。ご参加ご希望の書店様、ご連絡をお願いします。

◆ さて、50周年を記念して、私たちはこれからも歴史書を販売して頂く書店担当者様と共に、大阪と東京で「売り場担当者のための販売研修会」を開催いたします。内容は1：歴史書販売における「郷土書」の売上シェアについて：仙台をモデルとして（歴懇：春山晃宏）2：歴史書担当者に必要な基礎知識・情報収集のテクニック：郷土書の扱いについて（大阪高裁内BC：岡村正純）3：精文館書店本店における歴史書販売の試み：著者講演会20回4年間のあゆみ他（精文館書店：関剛士）4：質疑応答・議論。

大阪会場にご参加下さる書店様と会員社総勢63名。東京会場は80名を越えそうです。

こうして、私たちは次の世代に歴史書作りを引継いでまいります。

皆様これからもよろしく願い致します。

(FN)

文字と組織の世界史

鈴木 董著

—新しい「比較文明史」のスケッチ

諸文明を「文字世界」として可視化し、歴史上の巨大帝国を「支配組織」の比較優位で捉え直す。トインビー、マクニールを越える「比較文明史」の試み。全世界の動態がわかる1冊。

A5判 302頁＋口絵4頁 本体2000円



肉食の

社会史

歴史をひもとぎ、信仰・身分・差別などの視点をふまえて肉食の実態に迫る。

四六判

432頁 本体2500円



山里清内路の 社会構造

—近世から現代へ—

吉田伸之編 長野県南西端の美しい山里清内路。その豊富な史料群の、十数年に及ぶ調査研究を基礎に、清内路の近世から現代を多面的に描き、山里会から全体史を展望する。

A5判

416頁 本体6000円

世界史リブレット人

A5変型判 112頁 本体800円

80 近代中央アジアの群像

—革命の世代の軌跡者—

中央ユーラシア世界のなかで悠久の歴史を刻んできた中央アジアは、近代にロシアの支配に直面する。そこでムスリムはどのように生きただろう。彼らの軌跡を4人の人物に焦点をあててたどる。

小松久男著

歴史の転換期

シリーズ全11巻

各本体3,500円

- ① **B.C.220年** (既刊)
帝国と世界史の誕生
南川高志 編 四六判 280頁
- ② **378年** (既刊)
失われた古代帝国の秩序
南川高志 編 四六判 296頁
- ③ **1789年** 自由を求める時代 (既刊)
島田竜登 編 四六判 296頁
- ④ **1861年** 改革と試練の時代 (新刊)
小松久男 編 地中海沿岸のイタリア半島から日本海の対馬に及ぶユーラシアの東西で、さまざまな危機が生じていた1861年。打開の道はどこにあるのか。試練のときを生きた人びとの胸のうちと行動に迫る。 四六判 280頁

宗教の世界史 4 仏教の歴史 2

—東アジア

末木文美士 編

インドで興起しアジアに広く伝わった仏教。中でも中央アジアを経由し、東アジアに入った仏教は、中国を中心に朝鮮・日本が相互に関連し発展していった。その漢伝仏教を、時代を追って紹介する。

四六判 336頁＋口絵8頁 本体3500円

横浜華僑社会の形成と発展

—幕末開港期から関東大震災復興期まで—

伊藤泉美著 幕末の開港以後、中国人が横浜に進出し、中華街を形成し、それが発展するまでの、横浜華僑社会の歴史的過程を明らかにする。

A5判 520頁 本体8000円



山川出版社

東京都千代田区内神田 1-13-13

電話 03-3293-8131

https://www.yamakawa.co.jp/

【価格は税別】

〈東京オリンピック〉の

誕生

一九四〇年から
二〇二〇年へ

浜田幸雄著
38000円

一九四〇年開催予定であった幻の東京オリンピックから、一九六四年をへて二〇二〇年へ。戦時に返上した挫折から、戦後の開催へ招致活動した在米日系人やI.O.C.の動向など、その連続性に着目しメディア史から描く決定版。



東北の幕末維新

米沢藩士の
情報・交流・思想

友田昌宏著 激動の幕末、奥羽列藩同盟を主導した米沢藩にあって、情報的重要性を訴えた甘糟維成と、探索周旋活動に努めた宮島誠一郎・雲井龍雄。動乱の中で紡いだ思想と維新後の異なる歩みを追ひ、敗者の視点から幕末維新を描く。



前田利長

(人物叢書選) 見瀬和雄著
23000円

加賀前田家の二代当主。秀吉の死後、秀頼を補佐したのが家康暗殺計画の主謀者と説き、され徳川に下る。関ヶ原後は加賀・越中能登の統治に辣腕をふるった。幕藩制最大の大名として前田家の礎を築いた生涯を描く。



中世武士 畠山重忠

秩父平氏の嫡流

清水 亮著 武蔵国男衾郡畠山を本拠とした畠山重忠。分け隔てない廉直な人物と伝わるイメージの背景には、いかなるスタンスが秘められているのか。在地領主としての畠山氏のあり方に迫り、重忠という武士の生き方を描く。

(歴史文化ライブラリー①) 18000円

東京の歴史 全10巻

池 享櫻井良樹・陣内秀信・西木浩一・吉田伸之編 各2800円

現代語訳 小右記

後一条 天皇即位
倉本一宏編
30000円

敦明親王を東宮に立てることを条件に三条天皇が讓位し、道長外孫の後一条天皇が即位する。外祖父摂政の座に就いた道長に対する実質の眼差しや如何に、国母となった彰子の政治力についても詳細に記録する。

古墳時代の王権と

集団関係

和田晴吾著
38000円

全国各地の古墳はどう築造されていたのか。編年・時期区分の検証を元に、前方後円墳を頂点とする古墳の秩序の形成と変化を追究。ヤマト王権と地域勢力の関係を論じ、古墳時代の国家と社会の実態に迫る。

城と城下 近江戦国誌

(読みなおす)
小島道裕著 減び去った城館跡に人は魅せられる。環濠集落や土塁囲みの館城から、戦国大名の城下町や信長の安土まで。近江に残るさまざまな城館遺構を訪ね、失われた戦国社会の姿に迫る。
24000円

戦国大名大友氏の館と権力

鹿毛敏夫 坪根伸也編
90000円

奄美諸島編年史料

古琉球期編下
石上英一編
280000円

中近世山村の生業と社会

白水 智著
95000円

前近代日本の交通と社会

(への道①)
丸山雅成著
140000円

幕末対外関係と長崎

吉岡誠也著
110000円

中央区・台東区・墨田区・江東区

江戸東京の中心日本橋から銀座、市場で賑わう築地、大寺院が織りなす人氣観光地浅草・上野、水路が巡り震災・戦災の記憶が漂う本所・深川。江戸の余韻を湛えつつ、新たな歴史を築く隅田川周辺の特徴をさぐる。(地帯編②)

吉川弘文館

(価格は税別)
〒113-0033 東京都文京区本郷 7-2-8 / 電話 03-3813-9151 代表



歴史手帳 2019年版

日記と歴史百科が一冊となった、便利な手帳。 9500円

都市化のなかの 民俗学

倉石忠彦著／11000円
2018.10刊／A5判・500頁

自らの研究史をふまえ、「渋谷」の民俗、小説の中の民俗学など、新たなテーマで都市民俗学を記述。

神田祭の都市祝祭論

秋野淳一著 2018.02刊／A5判・658頁／13800円
戦後地域社会の変容と都市祭り 社会変動の影響が顕著に現れる大都市の祭り「神田祭」を宗教社会学的に考察し、その複合的構造を明らかにする。

仮親子関係の 民俗学的研究

藤原洋著
2018.09刊
A5判・454頁
9900円

筆親筆子と瀬戸内島嶼社会の家族誌 岡山県の笠岡諸島白石島の事例から、人とのつながりを見る。

おんなの身体論

鈴木明子著 2018.10刊／A5判・216頁／4800円
月経・産育・暮らし 月経名称とその意識の変遷を歴史的に追い、現代の事例から考察。更にお産を身体技法から読み解く。地域の事例2編ほか。

鳥海山修験

神田より子著 2018.03刊／A5判・364頁／7200円
山麓の生活と信仰 山形・秋田県境の3市町5地区の修験道の実態を永年にわたり調査研究した成果。今に伝わる暮らしや行事の中に、その姿を探る。

立山曼荼羅の成立と 縁起・登山案内図

福江充著
8600円

立山曼荼羅成立の前提となった縁起・登山案内図を分析し読み解く。(2018.07刊／A5判・394頁)

「俗信」と生活の知恵

佐々木美智子著 2018.06刊／A5判・414頁／9200円
播磨期の民俗誌から 生活に溶け込んだ俗信、すなわち「生活の知恵」を発掘し意義づけ、伝統社会に生きてきた「俗信」の実体を認識する試み。

近世在地修験と 地域社会

松野聡子著／7900円
2018.02刊／A5判・404頁

秋田藩を事例に 在地修験統制、在地修験寺院と地域社会、在地修験寺院の寺院経営、の3部構成。

武州御嶽山の史的 研究

武蔵御嶽神社及び御師家古文書学術調査団編 2018.03刊／A5判／5400円
法政大学と東京都青梅市教委とで組織した調査団20年の成果。村上直・馬場憲一ほか執筆。(264頁)

四国猿と蟹蜘蛛の明治大正

四国霊場巡拝記

佐藤久光編 2018.04刊／A5判・244頁／5400円
ペンネーム「四国猿」と「蟹蜘蛛」による、明治大正期の2種の新聞連載記事を収録し、解題を付す。

戦国期奥羽の地域と 大名・郡主

小林清治著作集2
2018.06刊／7900円

総論、北奥、浜通り・中通り・会津、の各地域ごとに計21論文を収録。(A5判・436頁／全3巻第2回)

「建久四年曾我事件」と 初期鎌倉幕府

伊藤邦彦著
A5判／16800円

曾我物語は何を伝えようとしたか 鎌倉幕府論の成果による「曾我物語」成立論。(2018.07刊／744頁)

近世前期神宮御師の 基礎的研究

谷戸佑紀著／7400円
A5判・340頁

近世史研究叢書48 江戸幕府や伊勢神宮の動きに注目しつつ、他の宗教者にも目配り。(2018.02刊)

日本史の まめまめしい知識3

日本史史料研究会編／1000円
2018.09刊／新書判・258頁

「ぶい&ぶい新書」0003 今回のテーマは「日本史のしっぽの先」、はて？。小論27編が勢揃い。



岩田書院

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山4-25-6-103【価格は税別】

TEL:03-3326-3757

FAX:03-3326-6788

http://www.iwata-shoin.co.jp

歴史書懇話会

▶ 会員社名簿 ◀

- 明石書店 101-0021 千代田区外神田 6-9-5 〈担当者：深谷直樹〉
TEL. 03-5818-1171 FAX. 03-5818-1174
- 東京堂出版 101-0051 千代田区神田神保町 1-17 〈担当者：力久尚之〉
TEL. 03-3233-3741 FAX. 03-3233-3746
- 刀水書房 101-0065 千代田区西神田 2-4-1 〈担当者：中村文江〉
TEL. 03-3261-6190 FAX. 03-3261-2234
- 同成社 102-0072 千代田区飯田橋 4-4-8 〈担当者：工藤龍平〉
TEL. 03-3239-1467 FAX. 03-3239-1466
- 塙書房 113-0033 文京区本郷 6-8-16 〈担当者：関口守俊〉
TEL. 03-3812-5821 FAX. 03-3811-0617
- 法藏館 600-8153 京都市下京区正面烏丸東入 〈担当者：西村明高〉
TEL. 075-343-5656 FAX. 075-371-0458
- ミネルヴァ書房 [本社] 607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町 1
TEL. 075-581-0296 FAX. 075-581-0589
[東京支社] 101-0062 千代田区神田駿河台 3-6-1 菱和ビルディング 2F
TEL.03-3525-8460 FAX.03-3525-8461 〈担当者：須藤 圭〉
- 山川出版社 101-0047 千代田区内神田 1-13-13 〈担当者：菊池敏彦〉
TEL. 03-3293-8132 FAX. 03-3292-2994
- 吉川弘文館 113-0033 文京区本郷 7-2-8 〈担当者：春山晃宏〉
TEL. 03-3813-9151 FAX. 03-3812-3544

2018年11月1日発行・第240号

発行 **歴史書懇話会**

113-0033 文京区本郷 7-2-8 吉川弘文館内
(非売品)

取扱店